豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

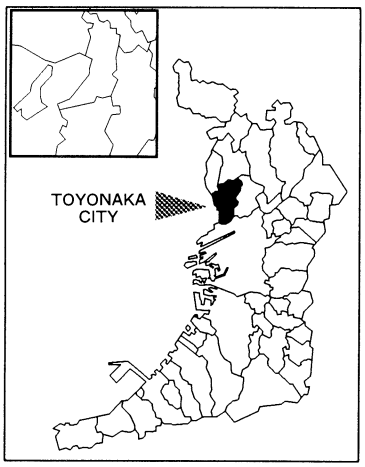
平成7(1995)年度

平成8(1996)年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成７(1995)年度



平成８(1996)年３月

豊中市教育委員会

序　　文

豊中市は、大都市大阪に隣接するベットタウンとして、また交通の要衝として、戦後近代的な都市へと発展してまいりました。その発展の一方では、太古より猪名川の豊かな流れに育まれた肥沃な大地に、あるいは緑なす千里の丘陵の中に生きた先人たちが残した貴重な文化遺産が消え去ろうとしています。

阪神淡路大震災からの復興とともに、新たなまちづくりが進むなか、ふるさとの歴史・文化・自然を生かした、より潤いのある生活を創造し、これからの社会へ伝えていくことが、いまを生きるわたしたちにとってより重要な課題となっております。

この報告は、文化遺産の一つである埋蔵文化財の重要性をふまえ、豊中市が平成６・７年度事業として国ならびに大阪府の補助を受けて実施した曽根遺跡・山ノ上遺跡の緊急発掘調査の概要と成果を報告するものです。これら二つの遺跡は、これまでに行った発掘調査からも豊中の歴史や文化を語るうえで欠かせない重要な遺跡であることが知られております。そして、今回の報告におきましても、新たに知見が加えられることになりました。

調査の実施に実施にあたっては諸先生方にご指導を賜り、土地所有者ならびに近隣の方々には文化財の重要性に対して深いご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係各機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のひとかたならぬお力添えにより、豊中市の文化財保護行政を推進できましたことを、ここに厚くお礼申し上げるとともに、今後もさらなるご支援をお願い申し上げます。

平成８年（1996年）３月28日

豊中市教育委員会
教育長　青　木　伊　織

例　　言

1．本書は、豊中市教育委員会が平成７年度国庫補助事業(総額2,000,000円、国庫50％、府費25％、市費25％）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘概要を報告し、あわせて、平成６年度事業としておこなった曽根遺跡の発掘調査概要の報告を行うこととする。

2．本年度は、山ノ上遺跡について平成７年（1995年）７月３日から平成８年（1996年）３月29日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。

3．発掘調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は、下表に記すとおりである。

4．曽根遺跡第４次調査においては、店舗および共同住宅部分を有しているため、延べ建築面積から専用住宅として個人が占有する面積を按分し、その部分について国庫補助費より調査費用を支出した。

5．本書のうち、第Ⅰ章は橘田正徳が、第Ⅱ章は服部聡志が、第Ⅲ章は清家章が執筆し、編集は橘田がおこなった。

6．曽根遺跡第４次調査土坑４埋土について、奈良国立文化財研究所　松井章氏の指導のもとに天理大学附属天理参考館　金原正明氏・古環境研究所　金原正子氏、岡山邦子氏に分析をお願いし、分析結果の報告を寄稿していただいた。

7．各挿図に掲載する方位のうちM.N.は磁北を示すものとし、Nまたは表記のないものは真北を示す。また、土色標記の基準は『新版標準土色帖1994年版』に基づく。

8．各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣の住民の方々には、文化財保護に対して深いご理解とご協力をいただきました。あわせてここに明記し、深謝いたします。

遺　跡　名	調　査　地	調査面積	担 当 者	調　査　期　間
曽根遺跡４次	曽根西町３丁目215	133㎡	服部　聡志	平成７年（1995年）１月10日 ～２月10日
山ノ上遺跡11次	宝山町69-2の一部	75㎡	清家　　章	平成７年（1995年）７月３月 ～７月14日

目　　次

第Ⅰ章　位置と環境 …… 1

第Ⅱ章　曽根遺跡第４次調査

1．調査の経緯 …… 3
2．調査地点の位置と環境 …… 4
3．調査の成果
(1)　基本層序 …… 6
(2)　検出した遺構と遺物 …… 6
4．調査のまとめ ……18
5．土坑４における寄生虫卵分析、花粉分析、フローテーション ……19

第Ⅲ章　山ノ上遺跡第11次調査

1．調査の経緯 ……21
2．調査の概要
(1)　基本層序 ……21
(2)　検出した遺構 ……22
(3)　出土遺物 ……24
3．まとめ ……25

挿図・表目次

第Ⅰ章　位置と環境

第１図　遺跡分布図……vi
第２図　曽根遺跡大型掘立柱建物群…… 2

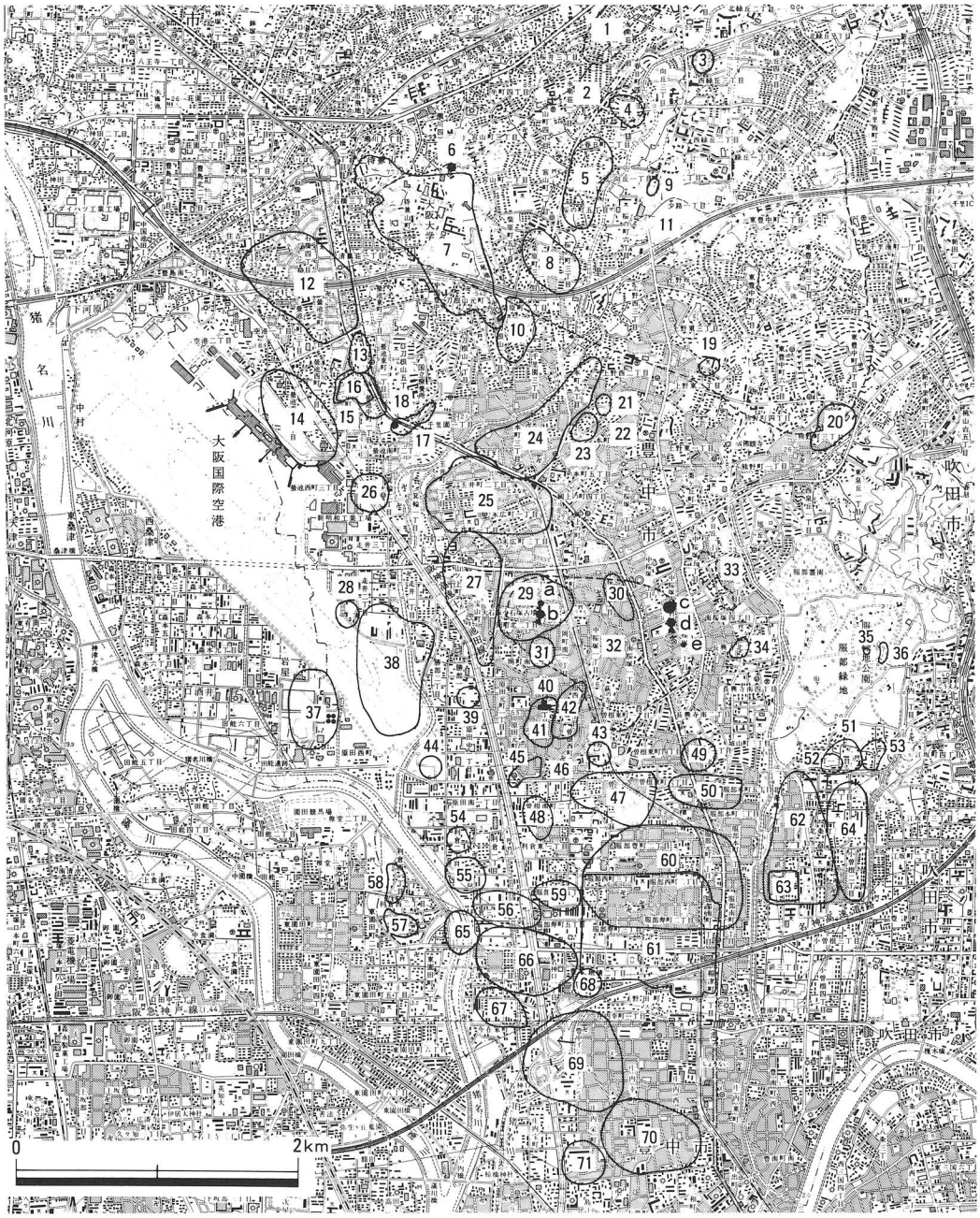
第Ⅱ章　曽根遺跡第４次調査

第３図　調査範囲図…… 3
第４図　調査地点位置図…… 3
第５図　曽根遺跡周辺の地形…… 4
第６図　調査区全体図…… 5
第７図　掘立柱建物１、２平面・断面図…… 7

第８図　掘立柱建物３、４平面・断面図……８
第９図　掘立柱建物５平面・断面図……９
第10図　各土坑平面・断面図……10
第11図　土坑１出土遺物……11
第12図　土坑２出土遺物……11
第13図　土坑３出土遺物……12
第14図　土坑４平面・断面図……13
第15図　土坑４出土遺物……13
第16図　土坑５、６出土遺物……15
第17図　土坑８出土遺物……15
第18図　溝３出土遺物……15
第19図　落ち込み１断面図……17
第20図　柱穴出土の遺物……17
第21図　深度別にみた柱穴……18
第１表　土坑４における花粉分析結果……20
第III章　山ノ上遺跡第11調査
第22図　調査範囲図……21
第23図　調査地点位置図……21
第24図　調査区平面図……22
第25図　ＳＰ６平面・断面図……23
第26図　ＳＰ６高坏出土状況……23
第27図　土坑１ミニチュア横瓶出土状況……23
第28図　土坑１断面図……24
第29図　出土遺物……25
第30図　山ノ上遺跡の遺構検出地点……26

図 版 目 次

図版１　曽根遺跡第４次調査地点　(1)　遺構検出状況（西から）
(2)　遺構検出状況（北から）
図版２　曽根遺跡第４次調査地点　(1)　遺構完掘状況（西から）
(2)　遺構完掘状況（南から）
図版３　曽根遺跡第４次調査地点　(1)　土坑２（東から）
(2)　土坑３（南から）
図版４　曽根遺跡第４次調査地点　(1)　土坑４（西から）
(2)　土坑４土層断面（西から）
図版５　曽根遺跡第４次調査地点　(1)　土坑５（北から）
(2)　土坑６（南西から）
図版６　曽根遺跡第４次調査地点　(1)　土坑８（南から）
(2)　土坑８土層断面（北から）
図版７　曽根遺跡第４次調査地点　(1)　落ち込み１（南から）
(2)　各柱穴断面
図版８　曽根遺跡第４次調査地点　出土遺物　(1)　土坑１出土遺物
(2)　土坑２出土遺物
図版９　曽根遺跡第４次調査地点　出土遺物　(1)　土坑３出土遺物
(2)　土坑５・６出土遺物
図版10　曽根遺跡第４次調査地点　出土遺物　土坑８出土遺物
図版11　曽根遺跡第４次調査地点　出土遺物　(1)　溝３、柱穴出土遺物
(2)　土坑４出土遺物
図版12　曽根遺跡第４次調査地点　土坑４採取土壌花粉化石
図版13　山ノ上遺跡第11次調査地点　(1)　遺構完掘状況（南東から）
(2)　遺構完掘状況（北東から）
図版14　山ノ上遺跡第11次調査地点　(1)　ＳＫ１土層断面
(2)～(5)　ＳＰ１～４土層断面
図版15　山ノ上遺跡第11次調査地点　出土遺物



1．太鼓塚古墳群
2．野畑春日町古墳群
3．野畑遺跡
4．野畑春日町遺跡
5．少路遺跡
6．待兼山古墳
7．待兼山遺跡
8．内田遺跡
9．桜井谷石器散布地
10．柴原遺跡
11．桜井谷窯跡群
12．蛍池北遺跡
13．蛍池東遺跡
14．蛍池西遺跡
15．蛍池遺跡
17．南刀根山遺跡
18．御神山遺跡
19．上野遺跡
20．熊野田遺跡
21．金寺山廃寺
22．新免宮山古墳群
23．金寺山廃寺塔刹柱礎石
24．本町遺跡
25．新免遺跡
26．箕輪遺跡
27．**山ノ上遺跡**
28．走井遺跡
29．岡町北遺跡
30．岡町遺跡
31．岡町南遺跡
32．桜塚古墳群
a．大石塚古墳
b．小石塚古墳
c．大塚古墳
d．御獅子塚古墳
e．南天平塚古墳
33．下原窯跡群
34．長興寺遺跡
35．梅塚古墳
36．埴輪散布地
37．原田西遺跡
38．勝部遺跡
39．勝部東遺跡
40．原田城跡
41．原田遺跡
42．**曽根遺跡**
43．曽根東遺跡
44．原田中町遺跡
45．原田元町遺跡
46．埴輪窯跡
47．豊島北遺跡
48．曽根南遺跡
49．城山遺跡
50．服部遺跡
51．若竹遺跡
52．石蓮寺遺跡
53．寺内遺跡
54．利倉北遺跡
55．利倉遺跡
56．利倉南遺跡
57．利倉西遺跡
58．椎堂の前遺跡
59．服部西遺跡
60．穂積遺跡
61．穂積村囲堤
62．小曽根遺跡
63．南郷目代今西家屋敷
64．北条遺跡
65．上津島川床遺跡
66．上津島遺跡
67．上津島南遺跡
68．穂積ポンプ場遺跡
69．島田遺跡
70．庄内遺跡
71．島江遺跡

第１図　遺跡分布図（１:5000）

第Ⅰ章　位置と環境

位置　豊中市は大阪府北西部に位置し、西は猪名川を介して兵庫県に接する。旧国の単位では摂津国豊島郡に属する。豊中市の地形を概観すると、北部から東部にかけては待兼山・島熊山などの丘陵と、これらから派生する高位段丘がひろがり、中部には通称豊中台地と呼ばれる中・低位段丘が、また南部から西部にかけては猪名川等の沖積作用によって形成された平野が豊中台地を囲むようにひろがる。

なお、曽根遺跡は先述の豊中台地南西端から南西方向へ伸びる舌状丘陵に、山ノ上遺跡は豊中台地中部西端の南北に伸びる舌状丘陵に立地する。

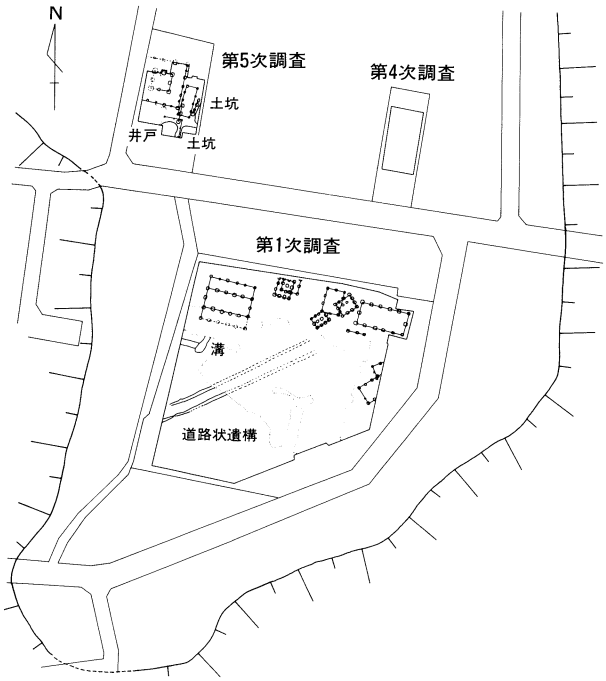
歴史的環境　ここでは、調査概要を報告する曽根遺跡、山ノ上遺跡について、遺跡の時期となる弥生時代から鎌倉時代の概略を述べることとする。

曽根遺跡は猪名川東岸の平野部と台地を結ぶ中継点に位置している。しかし、その周辺には原田遺跡が隣接するものの、台地上に隣接する遺跡は認められず、台地北西部の諸遺跡とは異なる様相を示す。曽根遺跡において集落が成立するのは、弥生時代中期後半から後期初頭と考えられる。この集落は後期から終末期にかけて丘陵のほぼ全域に展開し、古墳時代前期頃まで継続する。なお、ほぼ同じ時期の他の遺跡に比らべ、集落における掘立柱建物の占める割合が高い点で注目される。その後、古墳時代後期にも集落が形成するものの、本格的な集落が成立するのは奈良時代後期（末）となる。集落が丘陵西部を中心に展開すると間もなく、平安時代前期には丘陵の中央部に大型掘立柱建物群が出現する。建物群は大まか2時期の変遷をたどるが、その様相は著しく異なる。第1期（～9世紀前半）の建物群は、丘陵中央にて検出した古道の方向に主軸をあわせて建てられるが、建物の配置に計画性が認められないのに対して、第2期（9世紀後半～10世紀前半）には略東西を基準軸とする左右対称に近い建物配置の形態となり、建物も大型化する。第2期の建物群は、官衙または関連施設か領主居館と想定されるが、建物群に付属する井戸から出土した多数の墨書土器に官衙との関連を想定する文字の記載はなく、豊島郡内でも有数の生産基盤を保持する領主の居館となる可能性の方が高い。なお、第2期の建物群に前代の古道との関連はなくなるが、多数の製塩土器が出土したことなどから、その存立基盤を論じるときには流通との関連性も問われよう。建物群は平安時代中期頃に解体し、前後して散発的な建物群が丘陵上に展開する。このような状況は鎌倉時代後半まで続く。なお、本格的な集落は低位段丘上の原田遺跡・原田元町遺跡付近で展開するものと考えられる。

山ノ上遺跡が位置する台地北西部一帯には、新免遺跡、本町遺跡など弥生時代から古墳時代の大集落遺跡が広がる。なかでも北方に隣接する新免遺跡や、開析谷を隔てた東方の岡町北遺

跡との関連性が注目される。山ノ上遺跡は弥生時代前期にはじまるが、中期の様相は明確ではなく、この時期に拠点的な集落を形成する新免遺跡との関連が問題となろう。また、前期の遺構が丘陵上で検出されている点も注目される。弥生時代後期になると、明確に集落の形成が認められるようになり、以後古墳時代を通じて展開する。桜塚古墳群の形成期でもあるこの時期に集落が展開していることは、桜塚古墳群に一部重複する岡町北遺跡の動向とあわせて注意される。奈良時代頃になると、丘陵北部一帯にある程度まとった集落が展開するようであるが、その継続期間や状況については判然としない。なお、奈良時代から平安時代にかけて、市内では曽根遺跡をはじめ蛍池北遺跡など台地の縁辺部や舌状丘陵に立地し、交通上の要衝と考えられる遺跡で、まとまりのある集落や大型建物群が展開しており、山ノ上集落の消長を考える上で、こうした動向との関連性も問題となろう。その後、平安時代末になると遺跡北部の一角に寺院が造営されるが、周囲の状況が明確ではないため、造営の主体となり得る集団の存在は不明である。また、丘陵一帯に散発的な建物群が出現するが概要は不明である。

以上、曽根遺跡と山ノ上遺跡の動向について概観した。両遺跡は、共に舌状丘陵上に展開する時期幅の長い安定した集落遺跡であるが、それぞれの時代の様相に共通点は認めにくい。しかし、平安時代以降の集落の様相は類似する点も認められ、この時期における市内の集落の編成を考える上で注目される。今後は、周辺の遺跡との関連や集落の変遷、さらには存立基盤などの問題を明確にすることが課題となろう。



第２図　曽根遺跡大型掘立柱建物群（１:約1500）

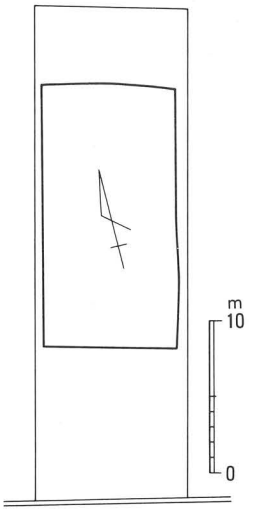
第II章　曽根遺跡第４次調査

１．調査の経緯

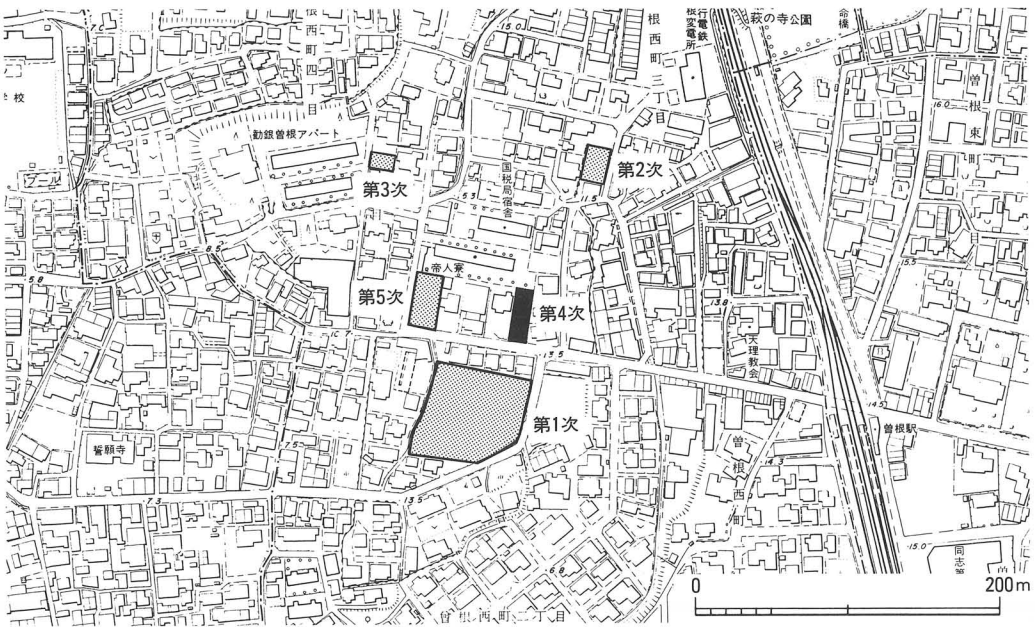
調査地点は、曽根西町３丁目215に所在する。平成６年12月６日に提出された建築確認申請書にもとづいて、試掘調査を実施したところ、現地表マイナス30cmの段丘層上面において顕著な遺構の存在が確認された。計画によれば建物構造に変更の余地はなく、その後の協議の結果、基礎工事により遺構が損壊を受ける約133.3㎡を対象に発掘調査を実施する運びとなった。

予定される建物は、施主個人の居宅部分と共同住宅部分に分かれ、調査経費については双方の按分比率にもとづいて、個人の居宅部分を国庫補助金の対象とし、残り共同住宅部分（営利）については原因者の負担によるものとした。

調査期間中、兵庫県南部地震により交通事情等の困難な中にもかかわらず、工事関係者の方々には、調査の遂行に多大な協力をいただいた。ここにあらためて感謝したい。



第３図　調査範囲図

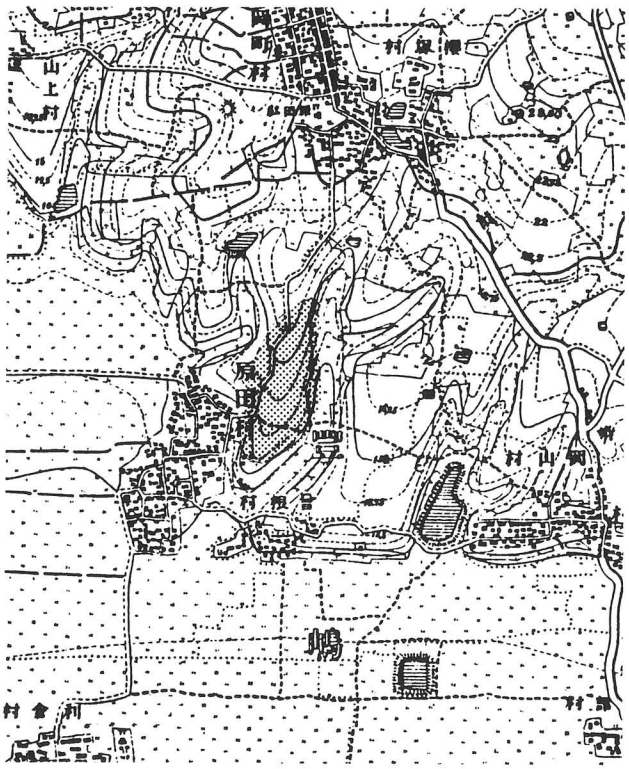


第４図　調査地点位置図（１:5000）

２．調査地点の位置と環境

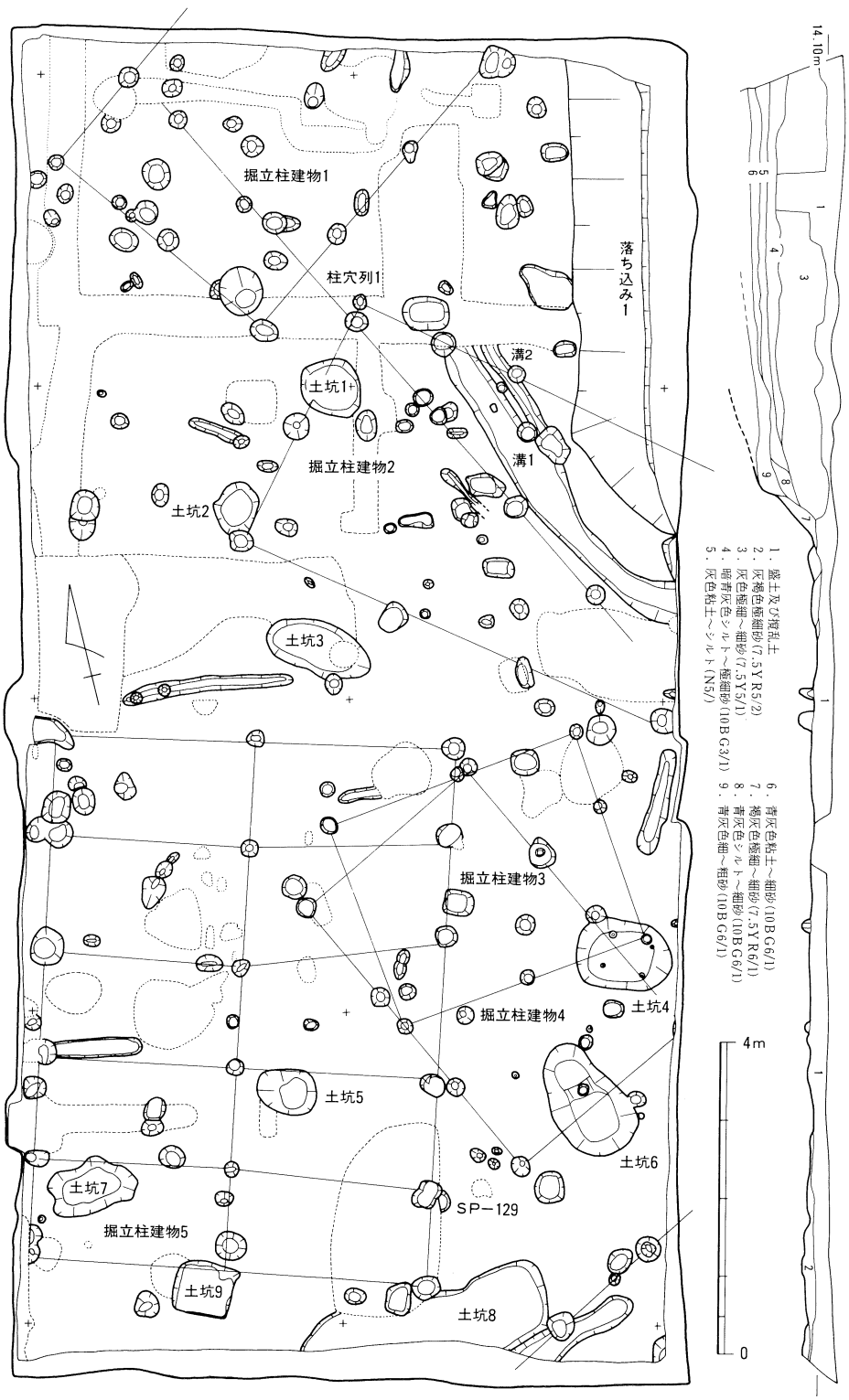
曽根遺跡は、通称豊中台地の南端部にあたる開析谷に挟まれた浸触地形、南北に長い尾根上に立地する遺跡である。近年の調査成果より、西側に張り出した同一尾根上の原田遺跡とともに一連の遺跡である可能性が推定されている。今回の調査地点は、遺跡南部の尾根頂上付近に位置する。

この遺跡では、早く昭和10年代頃より、住宅建設に際して弥生時代後期の包含層や古墳時代に属する住居跡の存在が知られていたが、本格的に調査が行われるようになったのは昭和61年からである。今回の調査地点の南方約100ｍの尾根突端付近に位置する第１次調査地点では、弥生時代後期の竪穴住居のほか、奈良ないし平安時代の大型建物を含む掘立柱建物群の存在が明らかとなり、古代以降にも継続する遺跡であることがはじめて判明した。つづく第２次調査では、尾根東側斜面部より、新たに古墳時代後期と鎌倉時代の建物跡が検出され、弥生時代以降、中世に至るまで、ほぼ間断なく継続的に営まれた集落遺跡であることが追認された。そして平成６年度に、尾根頂上付近であいついで行われた第３次、第４次調査地点でも、弥生時代後期の濃密な遺構の上に古代、中世の遺構が重複して検出されるに至っている。



第５図　曽根遺跡周辺の地形（１:20000）

以上のように曽根遺跡は、市域北部の段丘上に立地する遺跡の中でも、弥生時代以降中世まで継続する集落遺跡として、千里川流域に所在する新免遺跡、本町遺跡などとほぼ様相を同じくする。ただ当遺跡では上の２遺跡とは異なり、空間的に限定された立地条件にもかかわらず、官衙級の大型建物や、15世紀になると隣接して原田城が営まれるなど、やや特殊ともいえる状況が看取される。このことはおそらく、西と南の平野部を視野に納めた、すこぶる眺望のきく立地条件を考慮せずしては考えがたく、このような点を含めて、今後検討を深めていく必要があろう。



第６図　調査区全体図（１:90）

３．調査の成果

(1)　基本層序

今回の調査地点は、尾根地形の頂上付近という立地条件から、比較的削平を受けやすい環境下にあり、したがって調査区では、包含層の遺存はほとんど認められず、現地表下25cmの地山上面まで、一様な盛り土で覆われていた。ただし柱穴の深度などから、比較的遺構の残りは良好で、削平の程度もさほど顕著なものではなかったと推定される。

(2)　検出した遺構と遺物

今回の調査では、133㎡という狭い面積にもかかわらず、建物の柱穴をはじめとする比較的密集度の高い遺構が検出された。内訳を見ると、柱穴を含むピット170個、土坑９基、溝状遺構６条、落ち込み１か所である。このうち土坑４と２、３のピットが奈良ないし平安時代に、落ち込み１が中世以降と推定されるほかは、大半は弥生時代に属するものとみられる。多数のピットのうち、検出時ならびに断面観察の結果、明らかに柱の痕跡が確認されたのものは79個を数え、これまでに５棟の掘立柱建物を復元している。

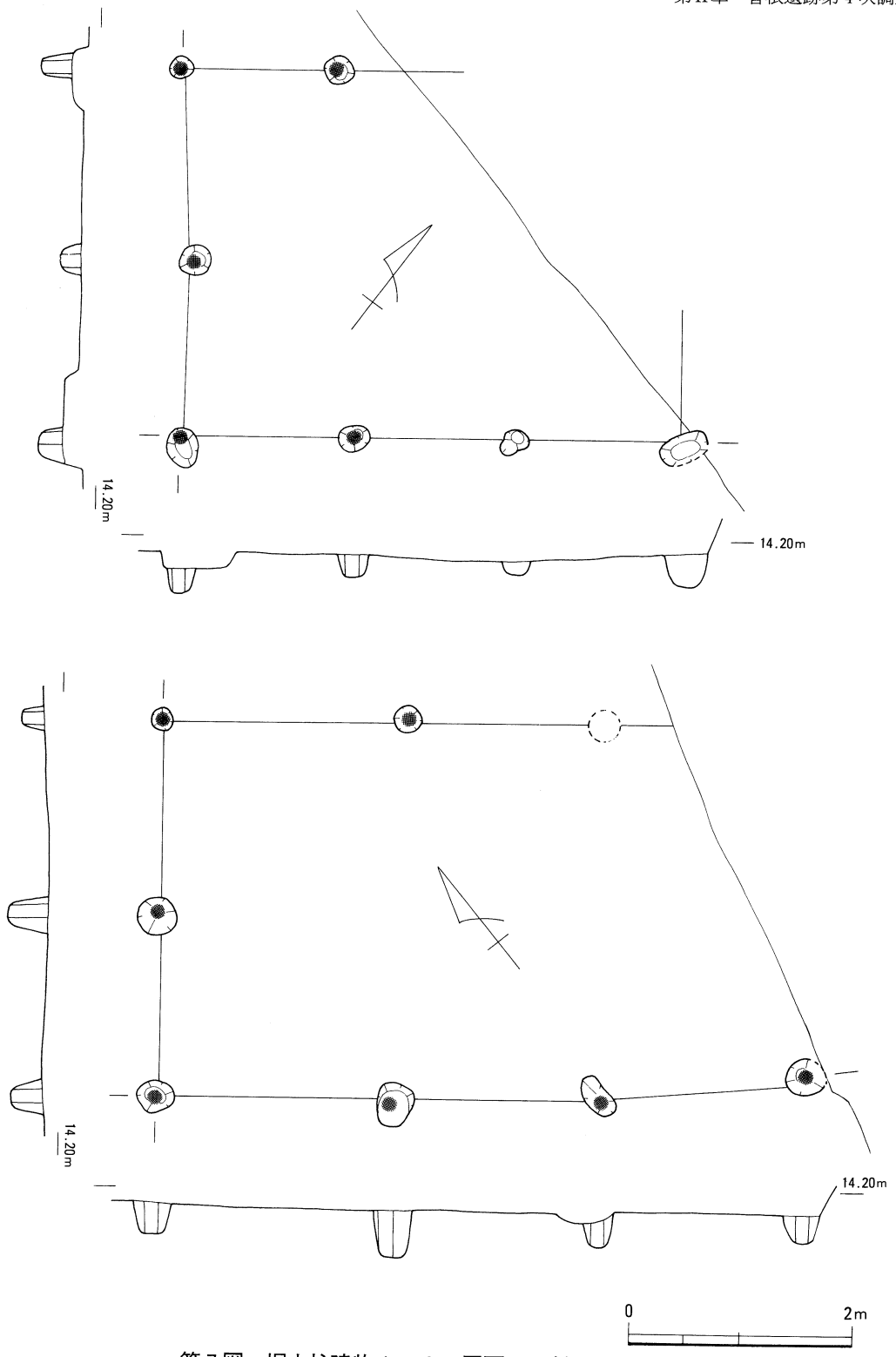
以下、主要な遺構について述べる。

掘立柱建物１　調査区外にのびるため必ずしも正確ではないが、桁行３間（約4.5m）、梁間２間（約3.3m）の規模が想定される。柱間は桁行約1.5m、梁間1.6～1.75mを計測する。柱穴の規模は、直径20～35cm、深さ12～30cm。柱穴の深度を掘形底部の標高で比較すると、コーナーの３ケ所が深く、ほぼ一定しているのに対し、それらの間の柱穴はやや浅い。建物の方位はＮ－54°17′－Ｅである。

掘立柱建物２　調査区内で検出した範囲を正確な規模と想定すれば、桁行３間(5.85m)、梁間２間（3.4m）を計測する。柱間は桁行1.9～2.1m、梁間約1.7mである。柱穴の規模は、直径18～35cm、深さ20～40cmとややばらつきがあり、掘形底部の標高も一定しない。検出した柱穴の全てから明瞭な柱痕が観察された。北西コーナーの柱穴は、土坑２と重複関係にあり、断面観察によれば明らかに建物の方が新しい。建物の方位はＮ－51°－Ｗである。

掘立柱建物３　桁行２間（3.3m）、梁間１間（2.7m）の小規模な建物が想定される。調査区の東側にのびていく可能性も考えられるが、柱穴の規模が、概して他の建物に比べて小さく、大型の建物は想定し難い。柱穴の深度は30～40cmで、掘形底部の深さもほぼ一定している。建物の方位はＮ－83°10′－Ｅである。

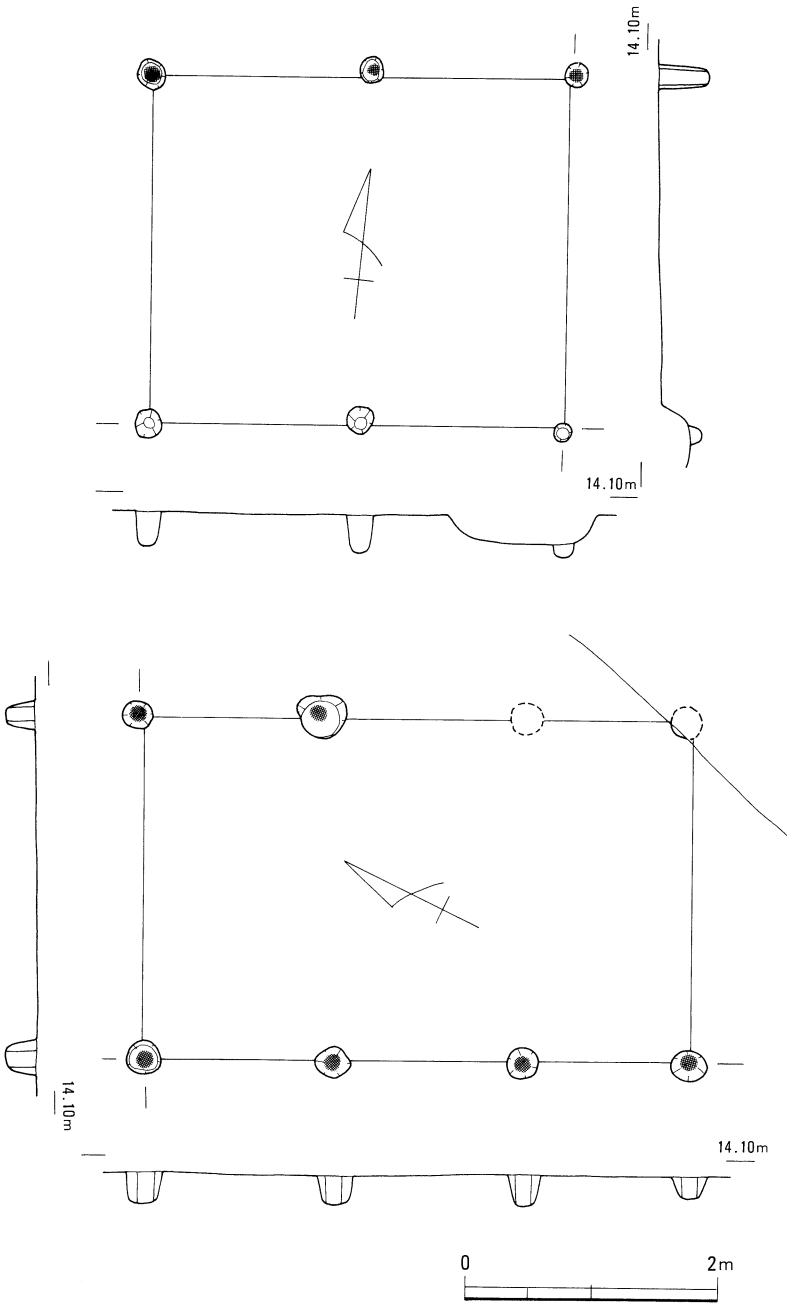
掘立柱建物４　桁行３間（4.3m）、梁間１間（2.7m）、桁行の柱間1.3～1.5mを計測する。柱穴の規模は、直径22～28cm、深さ18～25cmで、掘形底部の深さも概ね等しい。検出できた全ての柱穴より、明瞭な柱痕が観察された。建物の方位はＮ－26°8′－Ｗである。



第７図　掘立柱建物１、２　平面　・断面図（１:60）

（※標高の表記はすべて、東京湾平均海水位に基づく。）

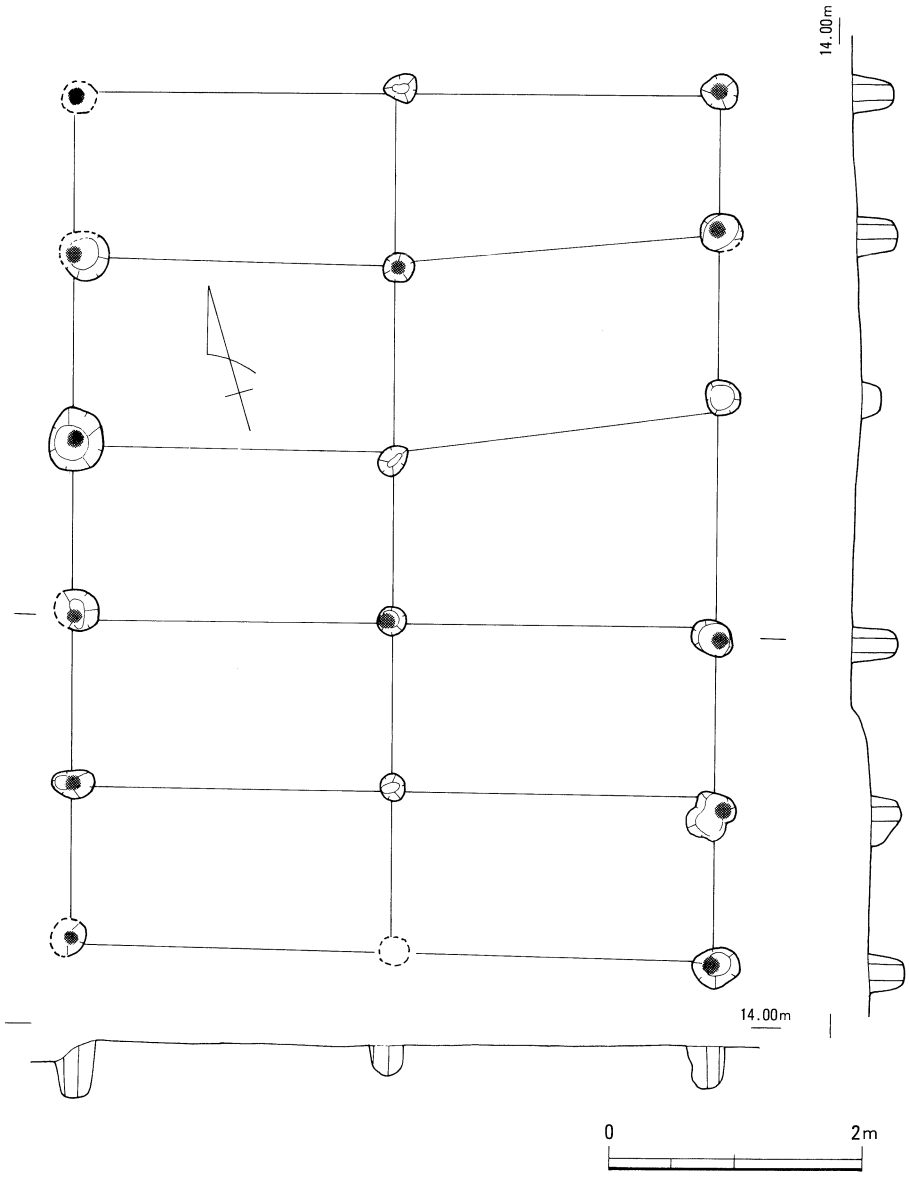
掘立柱建物５　桁行５間（6.85m）、梁間２間（5.05m）で、今回検出した建物のなかでは最も規模が大きい。柱間は、桁行1.1～1.9m、梁間約2.5mで、桁行東側列にやや乱れが認められるほかは、桁行の柱間は概ね1.3m前後に集中する。柱穴の規模は、桁行東西の列が直径30～50cm、深さ20～35cmであるのに対し、中央の列はいずれも直径が20cm前後、深さ20cm未満と小さい。調査区の西側にのびていく可能性もあるが、桁行中央列と東西列との対称的な柱穴規模の関係からすれば、その可能性は薄いと判断する。建物の方位はN－16°10′－Eである。



第８図　掘立柱建物３、４　平面　・断面図（１:60）

柱穴列１　調査区の北半部に、建物１、２と重複して並ぶ柱穴列である。確認できた柱穴の数は６個で、柱間1.6m～1.8mとほぼ一定している。６個のうち５個に明瞭な柱痕が観察された。柱穴列の左右には対応する柱穴列はみられず、建物跡である可能性は低い。

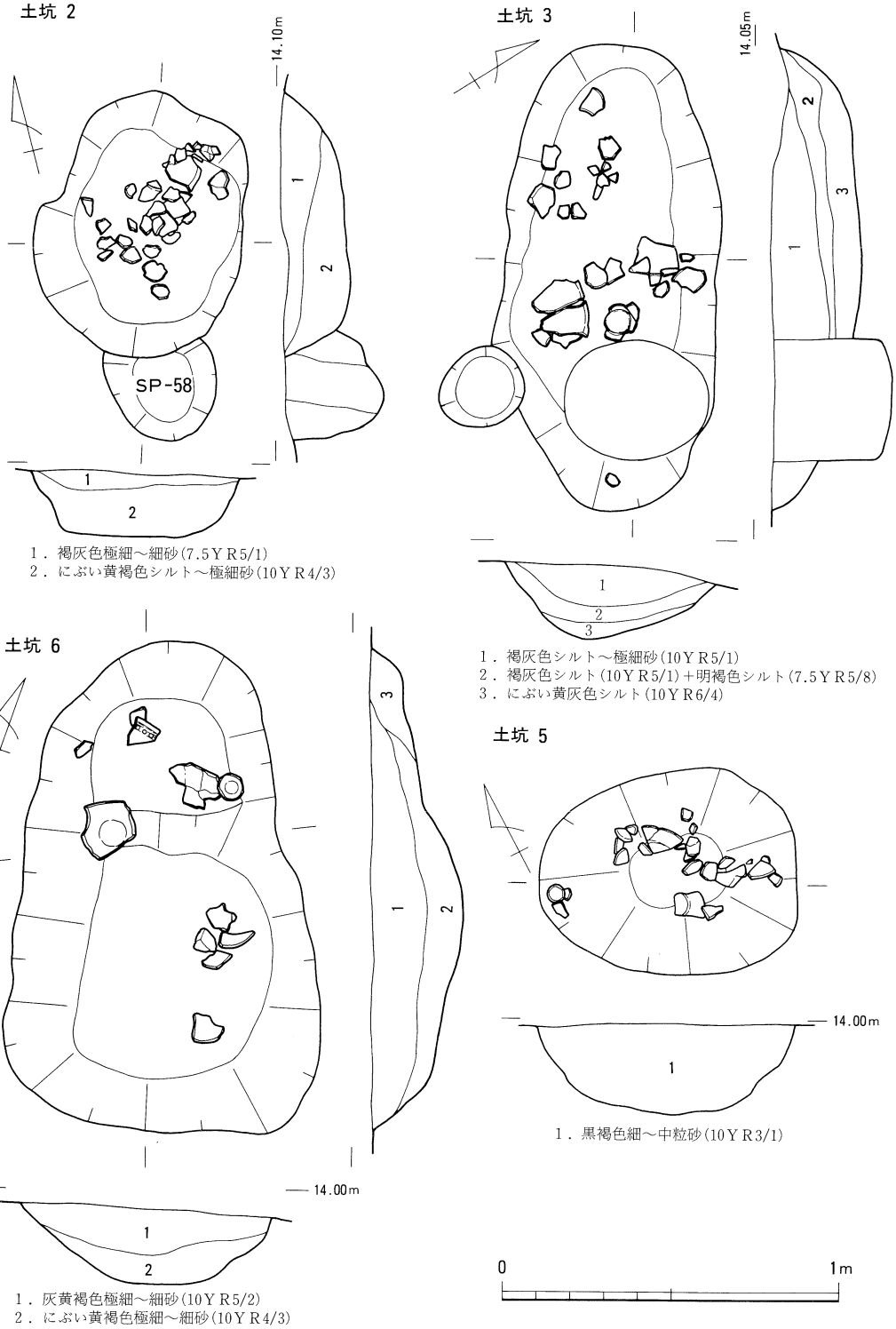
土坑１　平面形がおよそ円形に近い土坑で、直径0.76～0.85m、深さ約10cmを計測する。掘形の断面は丸く、黒褐色砂混シルトの覆土中より、比較的多くの土器片が出土した。



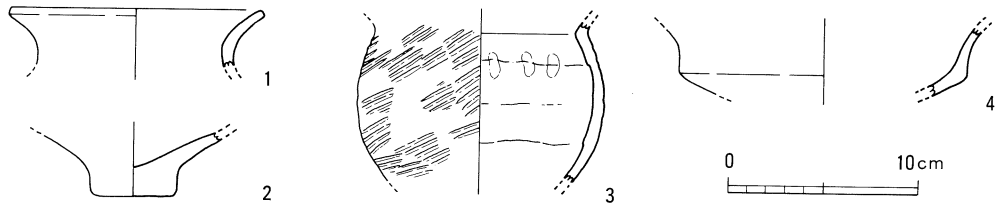
第９図　掘立柱建物５　平面　・断面図（１:60）

図化できた土器として、壷、甕、高坏がある（第11図１～４）。１は口径13cmの広口壷の口縁部とみられ、頸部から口縁部にかけて丸く外弯する。２は非常に突出度の高い壷の底部、３は「く」字状に外反する口縁を有する甕である。４は浅い坏部より明瞭な段をもち、大きく外反する口縁をもつ高坏である。弥生時代後期後半以降に比定される。

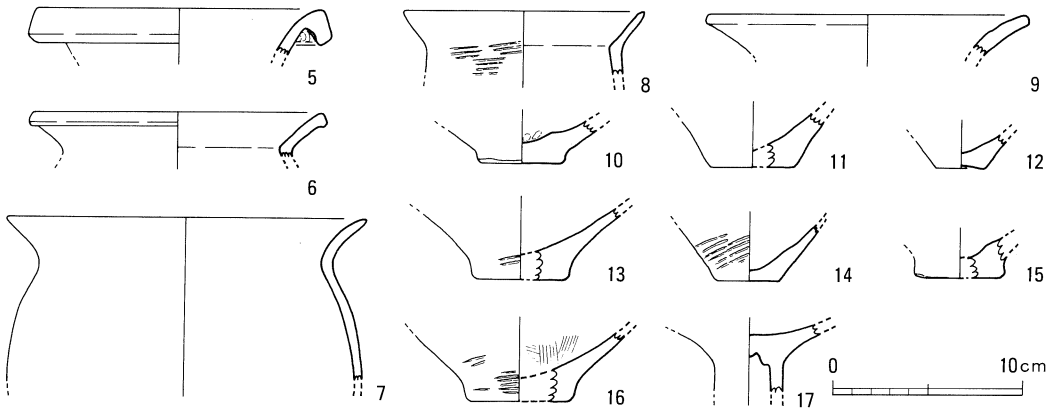
土坑２　南北にやや長い、楕円形平面を呈する土坑で、長径0.8m、短径0.6m、深さ20cmを計測する。覆土は２層に分かれ、上層より比較的多くの土器片が出土した。



第10図　各土坑　平面　・断面図（1:20）



第11図　土坑１　出土遺物（１：４）

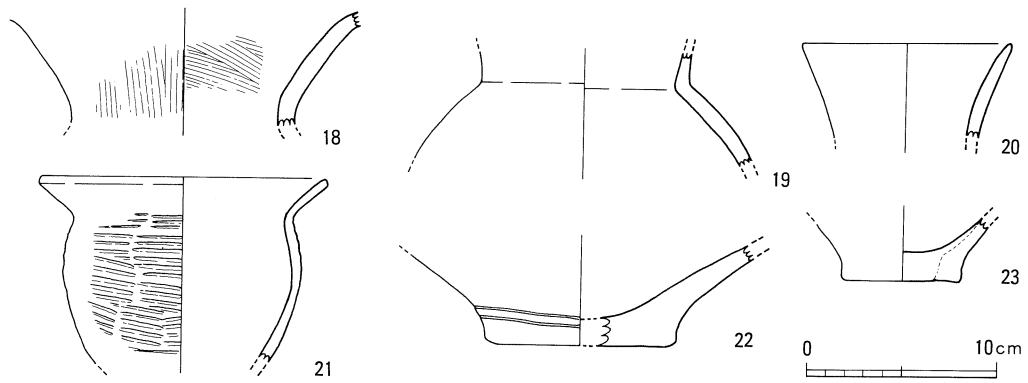


第12図　土坑２　出土遺物（１：４）

図化できたものとして、壷、甕、高坏の各破片がある(第12図５～17)。５は口径15cmの広口壷で、外反してのびる頸部より、斜め下方に垂下する口縁部を有する。口縁部の裏側には粘土を付加した際の、指頭による押圧痕が連続する。６～９は甕で、口縁部が「く」字状に外反するもの(６、８、９)、体部から口縁部にかけて丸く外弯するもの(７)がある。10～16は壷(10～13)と甕（14～16）の底部である。17は高坏で、浅い坏底部より垂直に下る脚柱部を有する。坏底部は円板充塡法によるもので、胎土は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土とみられる。

土坑３　長楕円形を呈する土坑で、長径1.39m、短径0.66mを計測する。深さ約25cmで、底部は丸く、覆土は３層に区分し得る。遺物は上層からまとまって出土した。

出土した土器には壷、甕がある（第13図)。18は広口壷の頸部から口縁部にかけての破片で、復元口径約18.5cm。口縁端部は残存しないが、下方に拡張もしくは垂下する口縁をもつものと思われる。頸部外面に縦方向の粗いハケ、内面に斜め方向の粗いハケ調整が施される。19は直口壷であろう。20は短頸壷の口縁部で、口径11cmを測る。21は外面に粗いタタキメを残す甕で、口径14.8cm、残存高9.7cm。口縁部は大きく「く」字状に外反するが、体部径は小さく張りが弱い。22は大型壷の底部で、底部径10cm。やや突出した底部より、体部が上方に真っ直ぐのびる。



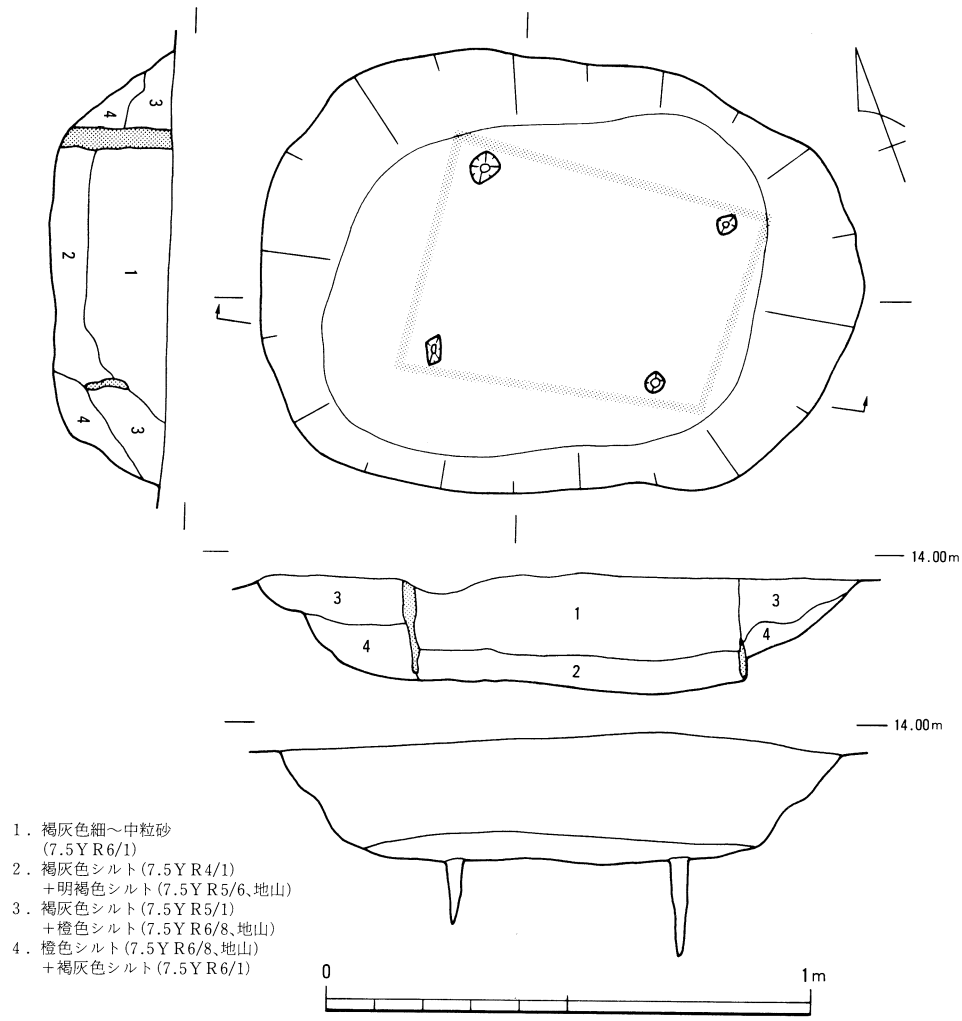
第13図　土坑３　出土遺物（１：４）

底部外面には、同時に施されたとみられる平行に走る２条の沈線がある。他の土器に比べると胎土に砂粒が多く、中期以前にさかのぼる可能性が高い。23は底部で、剝離状況から底部輪台技法により製作されたものと思われる。

土坑４　東西方向にやや長い、長楕円形を呈する土坑である。長径1.24m、短径0.92m、深さ約25cmを計測する。掘形の形状は、肩部はややなだらかに下るが、底部は比較的平坦に近い。土層断面の観察によると、覆土は土坑中央部と周辺部とに区分され、その境界部分に垂直に立ち上がる幅２～４cmのシルト質の土が認められた。これはもと板状のものが腐食したものである可能性が高く、土坑内に板材を用いた木枠状の構造物が設置されていたと考えられる。また掘形底部より、一辺3.5～６cmの方形状を呈する４個の小ピットが検出された。これらは掘形底部からの深さ14～20cmで、いずれも下へいくほど先細りとなり、おそらく上部から深く打ち込まれた杭とみられる。この杭状のピットは、さきの木枠との位置関係からすると、東西に長い木枠内側の長辺に沿うように並ぶ可能性が高く、木枠の固定を図るためのものと推定される。杭の配置と、断面にかかる腐食土の位置から、木枠は長辺0.67m、短辺0.44～0.52mの規模が復元できる。なお杭の存在から、底板はなかったものと推定される。

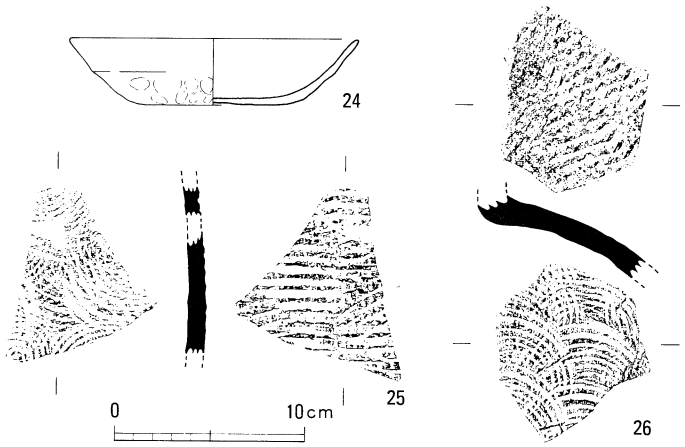
覆土は、想定される木枠の内外において土質を大きく異にする。まず木枠の内側では上下２層に明瞭に区分され、上層に褐色ないし黒褐色のシルト～細粒砂、下層に地山の黄褐色粘土粒を含む黒褐色粘土～シルトが堆積していた。このうち下層は有機質を思わせる粘性の高い土質を示す。これに対し木枠の外側では、上層に少量の地山粘土を含む褐灰色シルト、下層に多量の地山粘土に若干の褐灰色シルトを含む土層が観察され、いずれも木枠設置後に掘形との間を充填した裏込め土と見られる。

土坑４から出土した遺物として、土師器坏、須恵器甕の破片がある（第15図）。いずれも木枠内部の上層から出土した。24は土師器の坏で、口径15cm、器高3.5cm。淡橙色～明橙色の色調を呈し、胎土は比較的精良である。やや上げ底気味の平らな底部より、鈍い稜をもって体部が斜



1．褐灰色細～中粒砂
　(7.5YR6/1)
2．褐灰色シルト(7.5YR4/1)
　＋明褐色シルト(7.5YR5/6､地山)
3．褐灰色シルト(7.5YR5/1)
　＋橙色シルト(7.5YR6/8､地山)
4．橙色シルト(7.5YR6/8､地山)
　＋褐灰色シルト(7.5YR6/1)

第14図　土坑４　平面　・断面図



第15図　土坑４　出土遺物（１：４）

め上方に立ち上がる。体部下半に指頭による押圧痕、口縁部には横方向の強いナデが施され、体部中位に鈍い段が生じている。内面は全体に丁寧なナデ調整が施される。器壁の厚さは、底部が２㎜、体部～口縁部が４㎜以下で、全体に薄くつくられる。25は須恵器甕の体部、26は同じく肩部付近の破片である。いずれも外面に平行タタキ、内面に同心円文を明瞭に残す。これらの遺物のうち、土師器坏はやや深い器形と、平坦な底部から立ち上がる体部の傾斜角度などから、９世紀代の特徴を有するが、体部下半に成形段階の粗い指頭痕を残し、ナデ調整が体部上半に止まるなど調整の簡略化が進行している点において、やや新しい様相が認められ、10世紀以降に降る可能性も考えられる。

さて、このような四辺に板状の木枠を設置する遺構の性格として、井戸、墓、便所遺構等が考えられる。このうち井戸については、掘形の深度からその可能性は低く、墓についても底板をもたず、規模も小さいなど問題を残す。また便所遺構については近年、各時代の類例が報告されつつあるが、概して深度が深い特徴をもち、上部の削平を考慮に入れても深さ40㎝程度の当例とは様相を異にしている。ただし木枠内部に有機質を思わせる堆積土があり、今回、この土層について奈良国立文化財研究所の松井　章氏のご指導のもと、天理大学附属天理参考館　金原正明・古環境研究所　金原正子・岡山邦子の諸氏の協力を得て、分析を行った。その詳細は後節にゆずりたい。

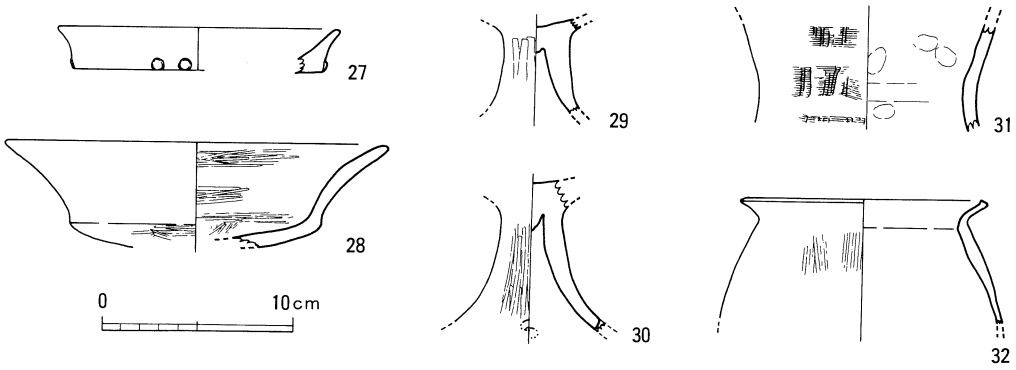
土坑５　長径0.76m、短径0.62m、深さ27㎝の、平面卵形を呈する小規模な土坑である。黒褐色シルト～細粒砂を覆土とし、そのほぼ中位より土器片がまとまって出土した。甕などの小破片のほか、高坏の大きな破片を含む。

出土遺物のうち図化できたものは二重口縁壷と高坏に限られる（第16図27～30）。27は二重口縁壷の小破片で、推定口径約14.5㎝。斜め上方に立ち上がる口縁外面の下端には、ほぼ２個一対とみられる直径７㎜の円形浮文が貼付されている。28は高坏の坏部で、丸みをもった浅い坏部より明瞭な段をもって大きく口縁部が外反する。坏部外面を水平方向のヘラミガキ、内面にも坏底部を放射状に、段より上を水平方向の丁寧なヘラミガキで調整している。29、30は高坏の脚部で、いずれも下部に向かってなだらかに開く形態を有する。調整は、いずれも外面に縦方向のヘラミガキ、内面は上部に細い棒状のものによる掻き取りの痕跡を残す。また30の脚部下半には透かし孔が観察される。

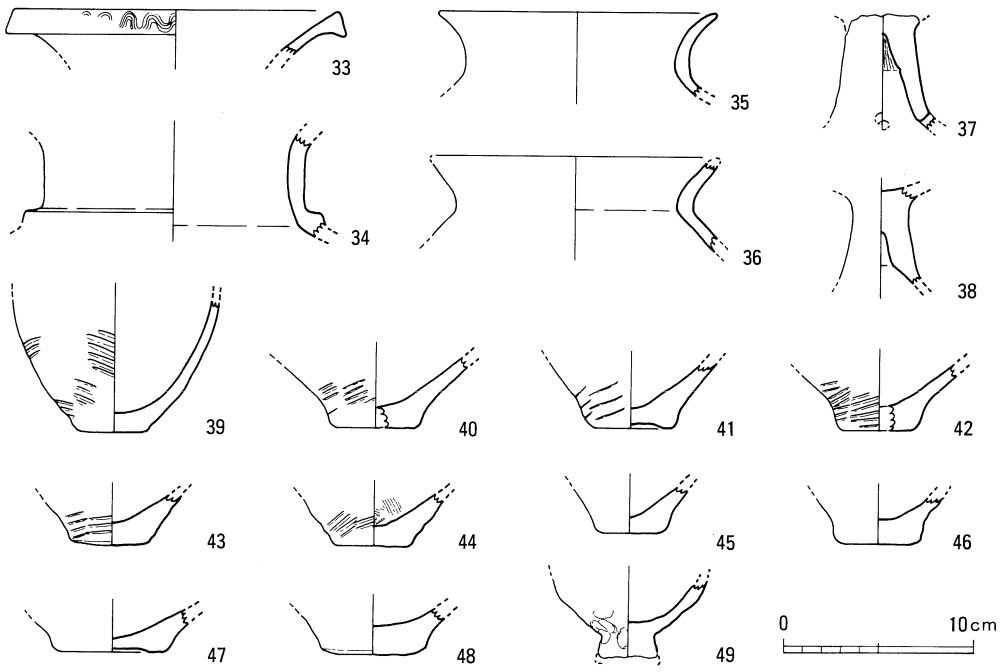
以上のうち、とくに高坏はその形態上の特徴から、庄内式古相の段階に位置付けられる。

土坑６　長径1.46m、短径0.7～0.93mの規模をもつ、やや不定形な土坑である。深さは北側と南側で異なり、北側で約15㎝、南側で約25㎝を計測し、途中にゆるい段を形成する。覆土は概ね２層に区分され、遺物はすべて上層から出土した。

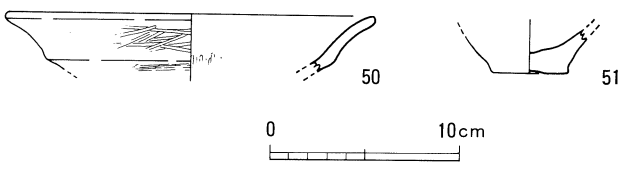
出土遺物（第16図31、32）として、図化できた壷頸部、甕のほか、厚手の器壁をもつ大形甕



第16図　土坑５、６　出土遺物（１：４）



第17図　土坑８　出土遺物（１：４）



第18図　溝３　出土遺物（１：４）

の体部破片数点がある。31は壷の頸部下半部の破片で、器面の残りが非常に悪いが、外面に3条程度の櫛描簾状文が認められる。簾状文の静止の間隔は短い。32は甕で、口径12.5cm。やや直線的にすぼまる体部から、やや丸みを持って短い口縁部が外反する。口縁端部は少し拡張して外傾し、端面はくぼみ気味の面をなす。風化のため明瞭ではないが、外面は縦方向のハケ、内面は丁寧なナデ調整が施される。これらの土器は弥生中期中葉に属するものと思われる。

土坑7　長径1.16m、短径0.6～0.7m、深さ10cm前後の不定形な浅い土坑である。出土遺物もなく、人為的に掘り込まれたものか不明。

土坑8　調査区の南端で検出した土坑で、全体の形状、規模は不明である。検出長3.2m、幅約1m、深さ20cm前後で、平面形は長方形状を呈するとみられる。覆土は2層程度に区分され、遺物は上層からまとまって出土した。

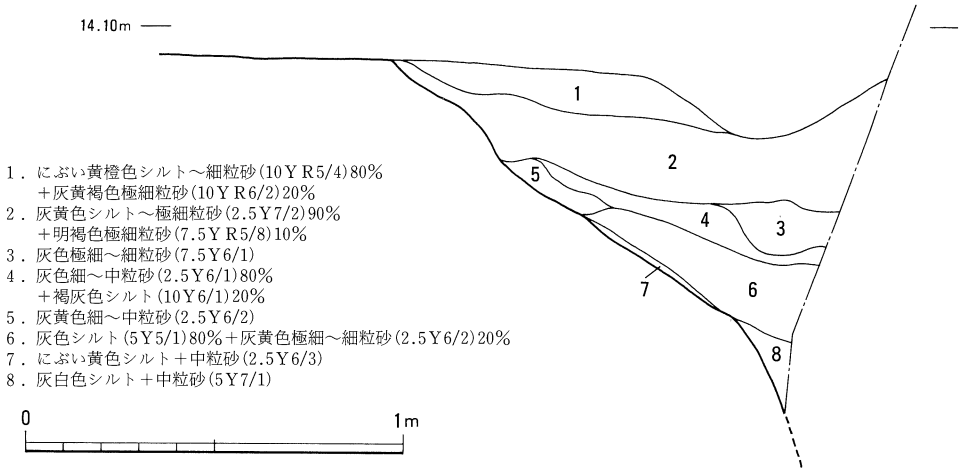
出土した土器には壷、甕、高坏がある(第17図33～49)。33は広口壷の口縁部で、復元口径15.8cm。大きくひらく頸部から、口縁端部下方に粘土を付加して拡張し、端面を形成する。端面には振幅の強いややルーズな櫛描波状文を施す。34は広口壷の頸部である。垂直気味に立ち上がる下半部から上半部が大きく外反する形態をもち、頸部下端に断面三角形の突帯を付す。35は短い口縁部を有する壷で、口径14.4cm。36は甕の肩部から口縁部の破片で、摩滅のため調整は不明。37、38は高坏の脚部である。37は二方の透かし孔を有し、下半部が屈曲気味にひらく。38は脚部の抉り込みが小さく全体として厚手で、下半に向かって緩やかにひらく形態をもつとみられる。39～46は甕の底部で、底面が平坦なもの、上げ底気味のもの、やや突出気味のものなどがある。47は壷の底部とみられ、生駒西麓産の胎土を有する。49は小さな脚台をもつ鉢ないし小形甕とみられる。外面全体に粗い指頭による成形痕を残し、手捏ねの印象を与える。

土坑9　南北0.68m、東西0.74mの規模をもつ方形の土坑である。深さは27cmで、周囲はほぼ垂直に掘り込まれ、底の形状は平坦に近い。覆土は、概ね褐色系のシルト～細粒砂と地山の黄色粘土を多量に含む土層とが交互に重なり、人為的な埋め戻しによる可能性が高い。断面の南北において柱痕状の土質の変化が認められたが、平面的にはとくに確認できなかった。土坑掘形と覆土の状況から、奈良時代以降の柱穴の可能性もあるが、出土遺物はすべて弥生後期の土器片に限られ、周囲に同様な柱穴が検出されないなど、問題を残している。

溝1　検出した長さ4.2m、幅0.3～0.55m、深さ10cm前後を計測する。北側で溝2と重複する。出土遺物は弥生後期の特徴をもつ小破片に限られる。

溝2　幅20cm、深さ7cmの小溝である。溝1と重複する。遺物は土器の細片少量。

溝3　長さ1.4m、幅25cm、深さ10cmの小溝である。覆土中より弥生後期の土器片が少量出土した(第18図50、51)。50は高坏の口縁部で、推定口径約19cm。丸い坏底部から短い口縁部がわずかに屈曲して外反する。外面は概ね水平方向のヘラミガキ。内面は丁寧なナデ調整が施される。

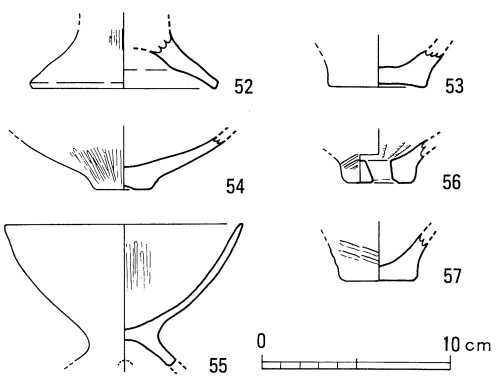


第19図　落ち込み１　断面図（１:20）

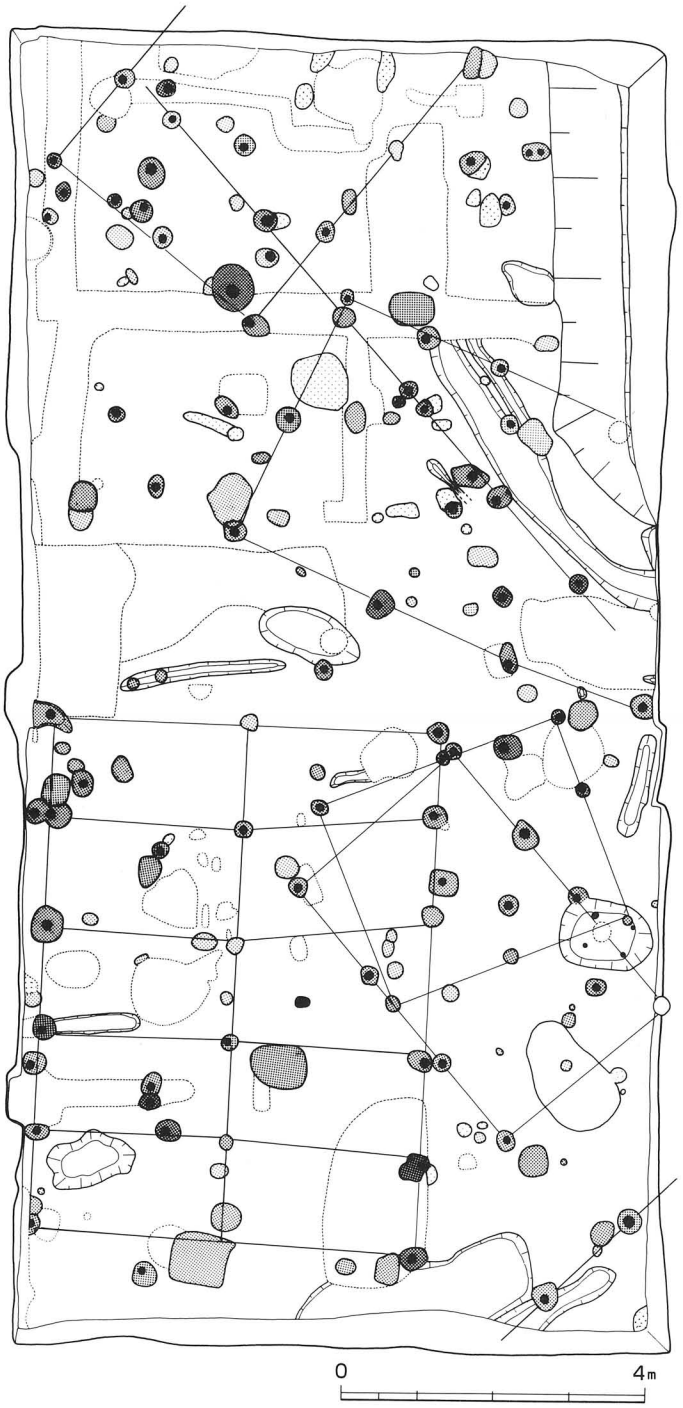
51は壷の底部で、内外面ともにナデ調整による。

落ち込み１　調査区の北東コーナー付近で検出した、大きな落ち込み状の遺構である。検出した長さ約６m、深さ１m以上、断面形態、覆土の状況から相当の規模を有するものとみられる。掘形全体の形状は不明であるが、検出範囲は南北にほぼ一直線で、南端付近で屈曲して途切れている。断面形態は二段落ちの形状を示し、上部は約37度、下部は約65度の急角度の傾斜をもつ。覆土中には近世以降の陶磁器片が含まれることから、遺構上層は近代以降の埋め戻しによるものと見られる。ただし遺構掘削の時期については必ずしも明らかではなく、掘形の形状などから、近在する原田城の関連遺構である可能性も考慮しておく必要があろう。

柱穴出土の遺物（第20図）　52は建物１の柱穴から出土した台付鉢、もしくは高坏の脚部とみられる。「ハ」字状にひらく脚部より上半部がやや垂直気味に伸びる。内面にはユビナデにともなう鋭い段があり、上半部は中実とみられる。外面と内面の一部にハケ痕跡を残す。53、54は壷の底部で、いずれも建物５の柱穴から出土した。53は全体に上げ底気味につくられ、斜め上方に体部が立ち上がる。54は小さな底部から体部が大きくひらいて伸びる。体部外面には縦方向のヘラミガキが施される。55はＳＰ－129出土の高坏である。鉢状の坏部に「ハ」字状にひらく脚部がつく。全体に風化が激しいが坏部内面に縦方向にヘラミガキ、脚部にスカシ孔の一部が観察される。56、57はその他のピットから出土した有孔鉢および甕の底部である。



第20図　柱穴出土の遺物（１：４）



第21図　深度別にみた柱穴（１:100）

４．調査のまとめ

今回の調査では、若干の遺構を除くと、大半は弥生時代後期～終末期に属し、中でもおびただしい数の柱穴が検出された点が特徴である。柱穴には柱の痕跡が明瞭に観察されたものが多く、復元作業の結果、これまでに５棟の建物を抽出しえた。これらの建物の方位には必ずしも規則性は認められず、重複もしくは近接する位置関係からみて、２、３世代以上にわたり営まれたものと推定される。また、弥生時代後期～終末期に比定されるこれらの建物群は、竪穴住居を全く含まない点から、今後集落内における建物の機能差や、豊中市域における当該期の地域性を考えるうえで、重要な成果が得られたものといえよう。

なお、土坑４から採取した堆積土分析の結果、平安時代における畑作が裏付けられたことで、今後周辺での景観復元を行う上で貴重な成果が得られたものと考える。

5．土坑4における寄生虫卵分析、花粉分析、フローテーション

天理大学附属天理参考館　金原正明・古環境研究所　金原正子・岡山邦子

1．目的と試料について

曽根遺跡第4次調査で検出された土坑4の堆積土の分析を行ったので報告を行う。土坑4は径1m前後の楕円形を呈し、4本の杭痕と板枠痕のある土坑であり、便所遺構の疑いももたれる。堆積物は土坑4の土層断面の上層と下層において採取されてあった。17点の試料中、9点について分析を行った。なお、花粉分析と寄生虫卵分析は同一サンプルを使用した。

2．寄生虫卵分析

1）方法

寄生虫卵の抽出には次の順で処理を施し分析を行った。i）サンプルを採量する。ii）脱イオン水を加え攪拌する。iii）篩分により大きな砂粒や木片等を除去し沈殿法を施す。iv）25%フッ化水素酸を加え30分放置（2・3度混和)。v）水洗後サンプルを2分する。vi）片方にアセトリシス処理を施す。vii）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。viii）検鏡・計数を行う。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

2）結果

検鏡の結果、各試料とも寄生虫卵が検出されなかった。

3．花粉分析

1）方法

試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。i）5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。ii)水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。iii）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。iv）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。v）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。vi）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。検鏡はプラパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。

2）結果

各試料とも花粉数が少なかった。下層（試料6～9）がやや多く、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、草本花粉ではイネ科ヨモギ属が主に出現する。試料5、6からはソバ属が検出された。

4．フローテーション

1）方法

試料（堆積物）100ccについて、0.25㎜篩を用いて水洗選別を行った。

2）結果

各試料とも種実等の大型植物遺体は検出されなかった。

5．考　察

分析の結果、土坑4の堆積物からは少量の花粉が検出されたのみであった。この結果からみて土坑4の堆積物が糞便の累積である可能性はないといえ、土坑4自体を便所遺構とする蓋然性はない。分析の結果と試料（堆積物）の状況からみて、土壌生成作用を受けつつ生成された堆積物が現地か移動して堆積したものとみなされる。花粉が少ないのは花粉が多く含まれるような水成の堆積物ではないためであり、種実などの大型植物遺体は分解された可能性が高い。

少量の花粉ではあるが、周囲でニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属、アカマツかクロマツ）、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）の樹木とイネ科、ヨモギ属の草本が優勢な人為性の高い植生が広がっていたことが推定される。ソバ属の出現から、ソバなどの畑作が行われていたとみなされる。平安時代におけるマツの二次林の成立とソバの畑作の盛行は西南日本の広範囲な農耕変革と考えられる。

参考文献

金原正明（1994）便所堆積物からさぐる古代人の食生活、助成研究の報告4、味の素食の文化センター

金原正明（1993）遺跡におけるソバ属花粉と事例、天理参考館報、第6号

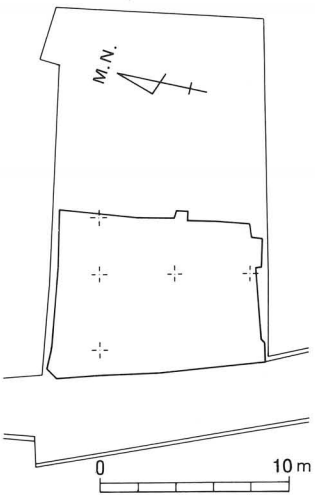
第1表　土坑4における花粉分析結果

分類群（1cc中）		土坑4								
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9
		板枠内上層				板枠内下層				
Arboreal pollen	樹木花粉									
Abies	モミ属							1		
Tsuga	ツガ属						1			
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	1	1		1		9	8	2	2
Cryptomeria japonica	スギ						1			
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ					1	1			
Juglans	クルミ属						1			
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ						1			
Fagus	ブナ属							1		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属					1	5	1		
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属		1	1		2	5	7	2	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ							1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉									
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科									1
Nonarboreal pollen	草本花粉									
Alisma	サジオモダカ属						1			
Gramineae	イネ科	1		2	1	3	19	30	5	6
Oryza type	イネ属型						1			
Cyperaceae	カヤツリグサ科						1	1		
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節					1		1		
Fagopyrum	ソバ科					3	3			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科						1			
Umbelliferae	セリ科						1	1		
Labiatae	シソ科						1			
Asteroideae	キク亜科						1			
Artemisia	ヨモギ属	2	1		1	8	38	17	4	5
Fern spore	シダ植物胞子									
Monolate type spore	単条溝胞子	1		1		1	4	2	1	1
Arboreal pollen	樹木花粉	1	2	1	1	4	24	19	4	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉									1
Nonarboreal pollen	草本花粉	3	1	2	2	15	67	50	9	11
Total pollen	花粉総数	4	3	3	3	19	91	69	13	14
Unknown pollen	未同定花粉	1	1	1	1	1	0	1	1	0
Farn spore	シダ植物胞子	1	0	1	0	1	4	2	1	1

第III章　山ノ上遺跡第11次調査

1．調査の経緯

当該調査地点は、豊中市宝山町69番２に所在する。今回、当地に個人住宅が新たに３戸建設される計画が持ち上がった。しかし、地表面の一部に遺構が露出していることが確認され、何らかの処置を講ずる必要性が生じたのである。その後、住宅建設により、西側１戸分の範囲の遺構が損なわれることが避けがたいことが判明し、協議の結果、この部分についてのみ事前の発掘調査を行うにいたった。調査対象面積は約75㎡で、1995年７月３日から14日までの日程で調査を行った。

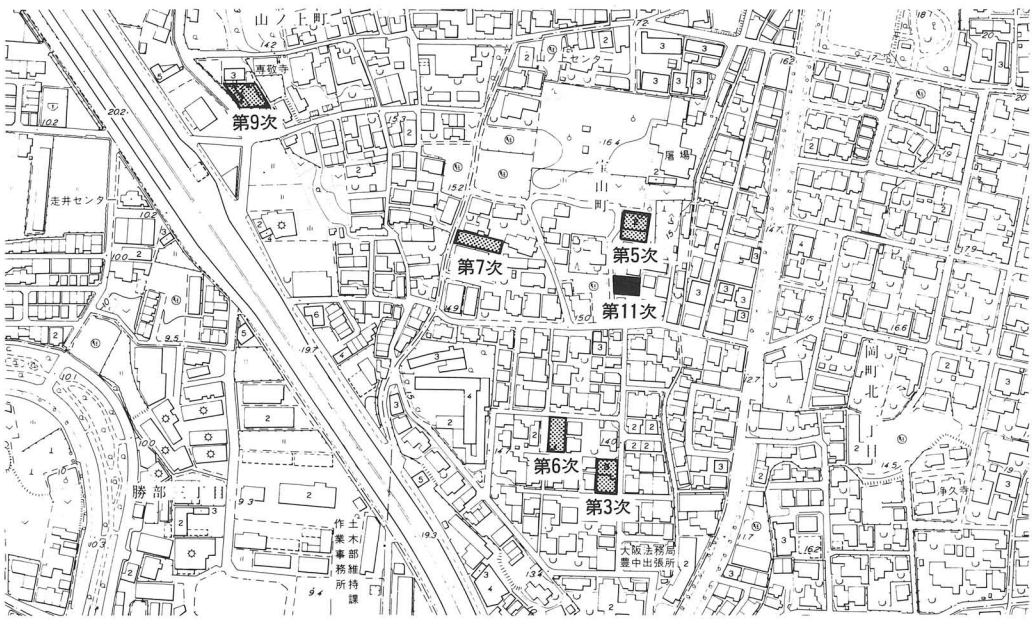


第22図　調査範囲図(1:400)

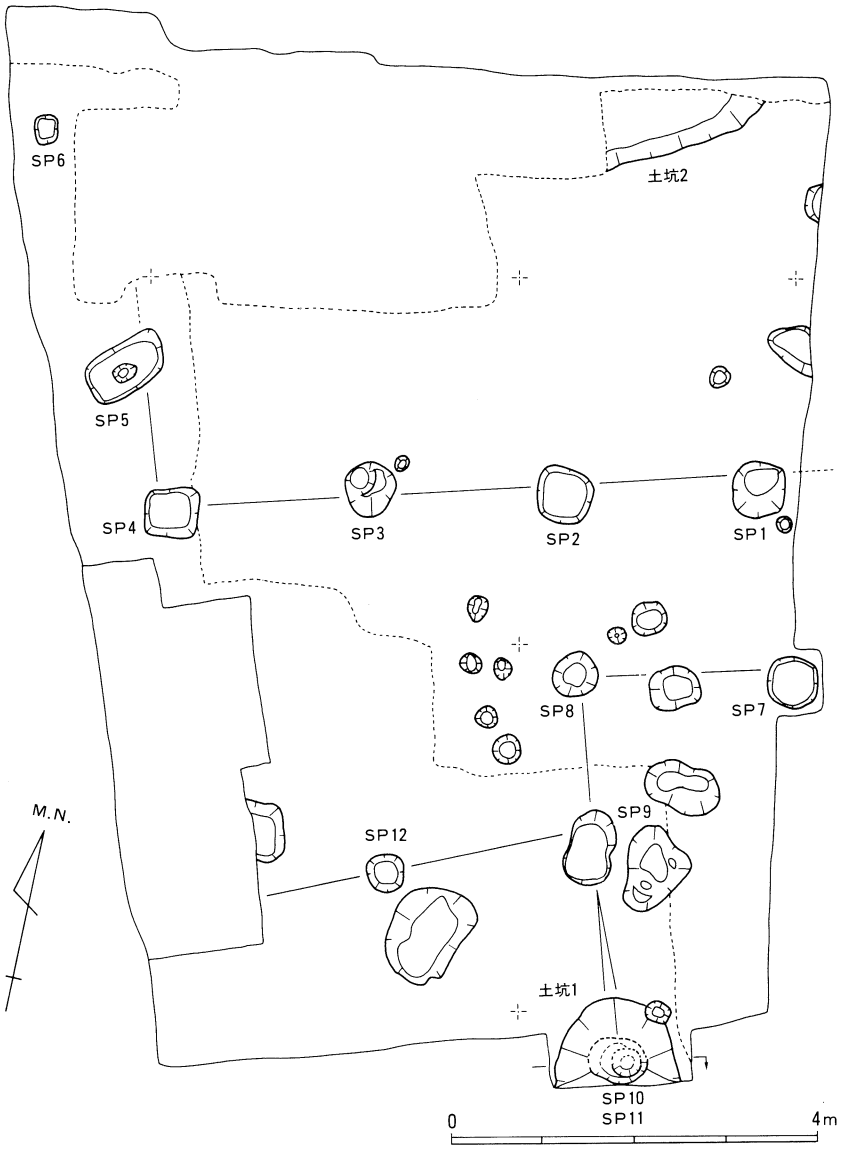
2．調査の概要

(1)　基本層序

当地点は低位段丘上にあるため、もともと後世の土の堆積は少なかったと考えられるが、耕作土やその他の堆積土の大部分は削平され、敷地の西側の大部分では、地山が露出していた。



第23図　調査地点位置図（１:5000）



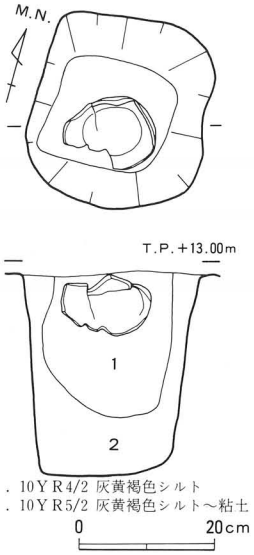
第24図　調査区平面図（1：80）

敷地の東側においても、地山の上に厚さ約10cmの現代の盛り土が認められただけで、遺物包含層は削平されたものと考えられる。地山は黄灰色シルトから構成されている。

(2)　検出した遺構

今回の調査では、かつて存在したと思われる包含層もすべて削平され、大きく撹乱を受けていたにも関わらず、ピット約30個、土坑３基と多くの遺構を検出することができた。遺構は、概ね６世紀の後半に属するものと、７世紀後半の頃とするものがある。以下にその概要を記していく。

ピット　調査区内からは多くのピットが検出され、中には確実に柱穴と考えられる遺構もある。しかし、調査範囲が狭いため明確に掘立柱建物の形を呈するものはない。ただ、調査区の中央に東西方向に並ぶ４つのピット（ＳＰ１～４）は、形・深さ共に類似しており、掘立柱建物の一辺に相当することが予想される。ピットは、現状で１辺約50cmの正方形をなしており、深さは約35cmを計る。ピットの中からは、土師器片が出土しているが、小片のためこの掘立柱建物の時期は決しがたい。



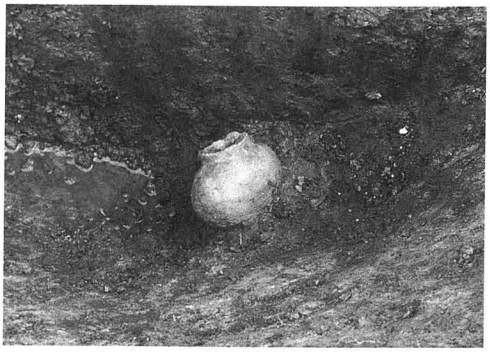
第25図　ＳＰ６平面・断面図

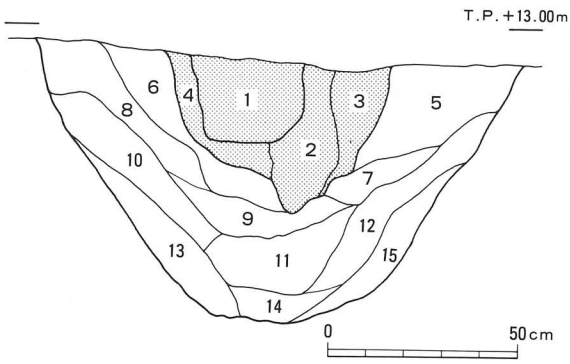
ＳＰ７・８・９・10とＳＰ９・11・12もＬ字形を呈することから、ほかに２棟の掘立柱建物が存在した可能性がある。ＳＰ10と11は土坑１の埋没後に掘削が行われている。土坑１の上層から出土した土器は７世紀後半に比定できる。後述するように、土坑１の上層から出土した土器はＳＰ10・11に伴う可能性が高いので、２棟の掘立柱建物は７世紀後半に属する可能性がある。

調査区北西隅にあるＳＰ６からは、土師器の高坏が内面を上に向けた状態で出土している。高坏はピットの上部から出土しており、あたかもくぼ地にはまりこんだような出土状況であった。おそらく、ピットが完全に埋没する前に、土器がピットの中に落ち込んだものと思われる。この高坏は、６世紀代後半に属するものと考えられる。ＳＰ６は大きさと深さから考えて、掘立柱建物を構成する柱穴の一つである可能性があり、ＳＰ６の存在は、当地に６世紀後半の掘立柱建物が存在した可能性を示すものである。

土坑１　土坑１は調査区の南端から検出されている。直径約130cm・深さ約70cmのおそらく円形の土坑である。検出当初、土坑は単独で存在すると考えていたが、断面観察の結果、土坑中央

第26図　ＳＰ６高杯出土状況


第27図　土坑１ミニチュア横瓶出土状況



1.褐色(10YR4/4)細粒砂～極細粒砂(SP10埋土)
2.にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混細粒砂(SP11埋土)
3.褐色(10YR4/4)細粒砂(SP11埋土)
4.にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂(SP11埋土)
5.にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト混細粒砂
6.にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
7.明黄褐色(10YR6/6)極細粒砂～シルト
8.にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂～シルト
9.黄橙色(10YR7/6)極細粒砂～シルト
10.灰黄褐色(10YR4/2)シルト混極細粒砂
11.褐灰色(10YR4/1)シルト
12.褐灰色(10YR4/1)細粒砂～極細粒砂
13.褐灰色(7.5YR4/1)極細粒砂～シルト
14.褐灰色(10YR4/1)極細粒砂～シルト
15.灰黄褐色(10YR5/2)極細粒砂～シルト

1～8層：上層埋土
9～24層：下層埋土

第28図　土坑1断面図（1:20）

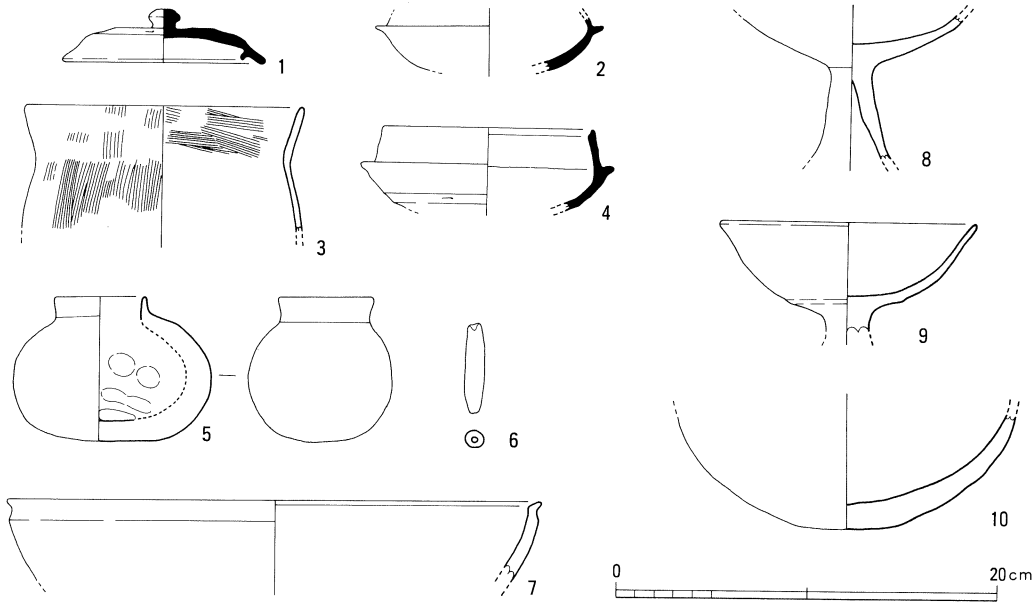
に2つのピット（SP10・11）が掘削されていることが明らかとなった。

土坑から出土した遺物は上・下層の2つに分類して取り上げたが、この2種類の遺物には時期差が認められる。上層からは、6世紀中～末の須恵器と共に7世紀後半に属する須恵器が出土した。下層からはミニチュアの土師質横瓶と6世紀前葉から後葉の須恵器が出土しているが、上層で見られたような7世紀後半代の遺物は認められなかった。おそらく、上層の7世紀代の須恵器は、土坑1埋没後に新たに掘削されたSP10・11に属するものと考えられる。以上のような想定が正しいとすると、土坑1は6世紀後葉に位置づけられよう。

(3)　出土遺物

土器は、整理箱にして半箱ほどの出土をみた。しかし、その大多数は小片であって図示しえるものはごく僅かである。

第29図1～7は土坑1から出土した土器である。このうち1・2・6・7は土坑の上層から出土したものであって、このうちの一部はSP10および11に属する可能性が高い遺物である。1は、天井部に宝珠つまみを有する坏蓋である。復元口径10.5cm、高さ3cm。坏内面にあるかえりは受部の中に隠れる。天井部の半分強をヘラケズリを行う。内面はナデで仕上げられる。2は須恵器の坏身である。2の受部径は12cm・残存高は2.5cmを計る。口縁端部は欠失しているが、立ち上がりの大きさは現状とあまり変わらないものと思われる。外面は磨滅しており、調整は不明である。内面はナデが施されている。6は土錘と考えられる。長さ4.8cm・最大直径1cm。中心に直径1mmの穴が貫通している。重量は4.6g。胎土には砂粒がわずかしか含まれておらず、緻密な感じを与える。山ノ上遺跡は台地上にあり、ここに住む集団と漁労活動とは積極的な関係を見い出しがたい。おそらく台地下の千里川で小規模な漁労活動を行った時に用いたのであろう。7は土師器の鉢か坏と考えられる個体である。小破片のため誤差を含んでいることが予想されるが、復元口径28cmを計る。口縁端部は肥厚し面を作る。内外面とも丁寧にナデ調整が施されている。



第29図　出土遺物（1：4）

3・4・5は、土坑1の下層から出土した土器である。3は土師器の坩もしくは小形の甕とみられるものである。胴部も大半は欠損しており、体部の上部からわずかに外反する口縁を持つ。外見はタテハケおよびナナメハケが施され、内面の口縁部から頸部まではヨコハケが、体部はナデ調整が行なわれている。4は須恵器の坏身で、その復元口径は11cm・残存高4cmで、立ち上がりは2cmを計る。底部の4分の3までがヘラケズリが施され、内面は丁寧なナデによって仕上げがなされている。口縁端部は明瞭な段をなしている。5は土師質のミニチュア横瓶と考えられる土器である。口径4.8cm・高さ8cm・胴部最大幅10cm余を計る。内面には指頭圧痕や粗いユビナデがいくつものこり、おそらく手づくねで作ったと思われる。外面は摩滅しており、調整は不明である。体部の器壁はきわめて厚く、おそらく1cm以上は存在する。

8は土坑2より出土した土師器の高坏である。内外面ともに風化が進み、調整はほとんど残されていない。

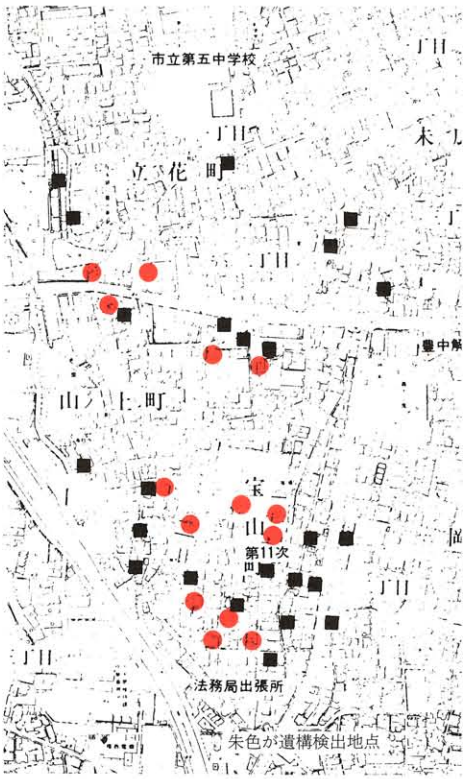
9の高坏はＳＰ6から出土した（第25･26図）。脚部を欠く。口縁部径13.4cm 坏部の高さ2.3cm。内外面それぞれにナナメハケがわずかに認められる。また、坏部外面において、脚部との連結部分から約3.8cmのところで、粘土の接合の際に生じたと思われる凹部が観察される。

10は土師器の壷もしくは甕の底部と考えられる個体である。ＳＰ5から出土した。底の厚みは8㎜を計る。砂粒を多く含み粗雑な感じのする個体である。摩擦が激しく調整等の観察はできなかった。

3．まとめ

以上、今回の調査で検出された遺構と遺物について概略を記した。調査面積が狭いにも関わらず、多数のピットや土坑が検出され、この地に掘立柱建物を中心とした集落が存在することが明らかにされた。遺構の時期は、特定する材料が少ないのでやや正確さを欠くが、古墳時代後期と飛鳥時代の2時期に分かれるものと推測される。

第30図は山ノ上遺跡において試掘調査と本調査での遺構の検出状況をまとめたものである。このようにしてみると立花町2丁目付近から南に伸びる舌状の小尾根上から遺構が多く検出されている。今回の調査地点はそうした小尾根の東端近くにあり、集落の東辺の一部であると評価できる。集落の中心から外れたこの地で、数棟の掘立柱建物が存在する可能性が示されたことは、集落の構造を解明していく過程で、今後重要な資料となることだろう。

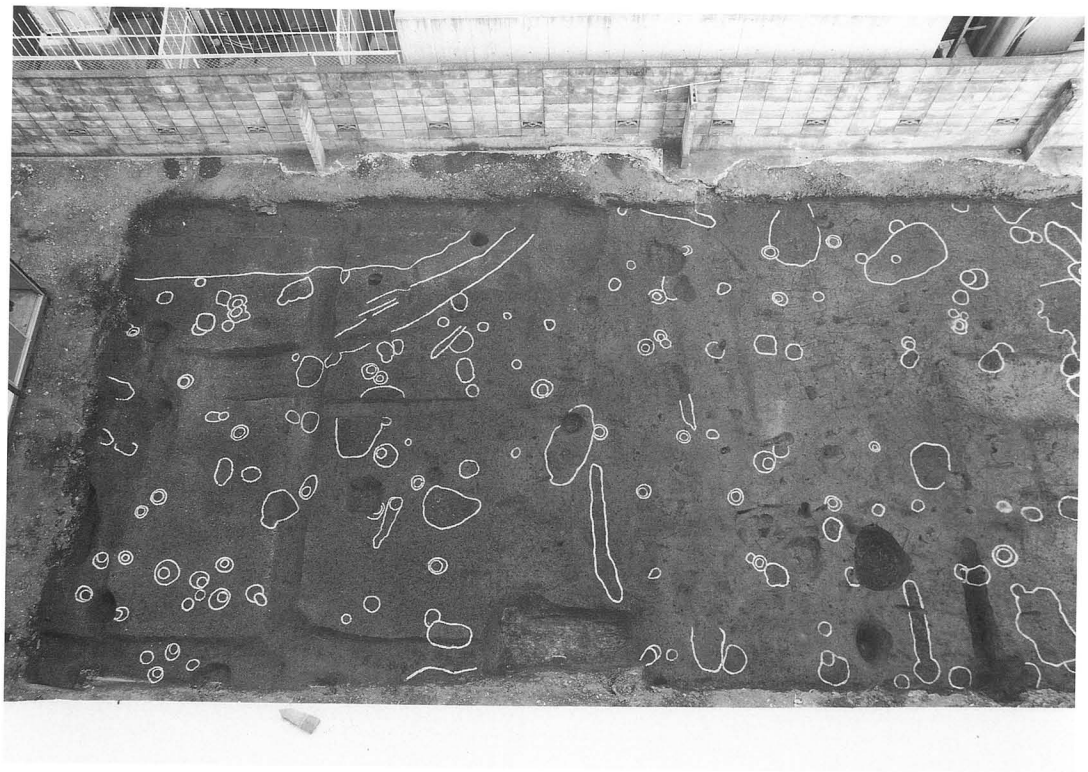


第30図　山ノ上遺跡の遺構検出地点

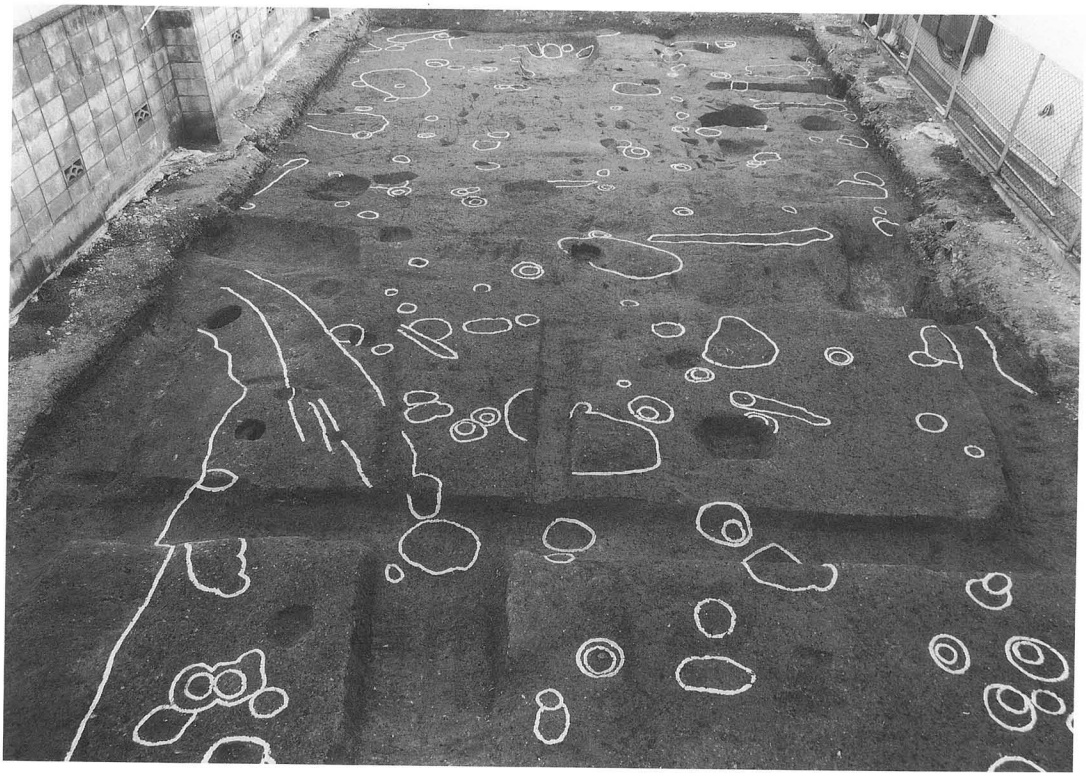
山ノ上遺跡は、これまでの調査で古墳時代中期の竪穴住居や古墳時代後期・奈良時代・平安時代の掘立柱建物がいくつか見つかっており、古墳時代以降断続的に集落が作られていることが分かっている。そして今回の調査でも、古墳時代後期と飛鳥時代の掘立柱建物が存在する可能性が提示され、山ノ上遺跡が長期にわたって集落として存続した事実を裏付けることができた。ただ、いずれの調査も小規模なため、山ノ上遺跡の全容は解明されたとはいえない。しかも、山ノ上遺跡は西摂津の古墳時代をリードした桜塚古墳群の膝元にあたる集落であり、その存在は軽視されるべきものでない。今後も調査を積み重ねていき、その具体的な内容を明らかにしていく必要があるだろう。

なお、遺構は、当調査地点の範囲外に広がっていることが確実であり、かつ今回の調査では遺構が地面に露出、あるいは表土直下というきわめて浅いところから検出されている。このことから、今後の周辺の開発には十分に注意を払う必要があると思われる。

図　　版



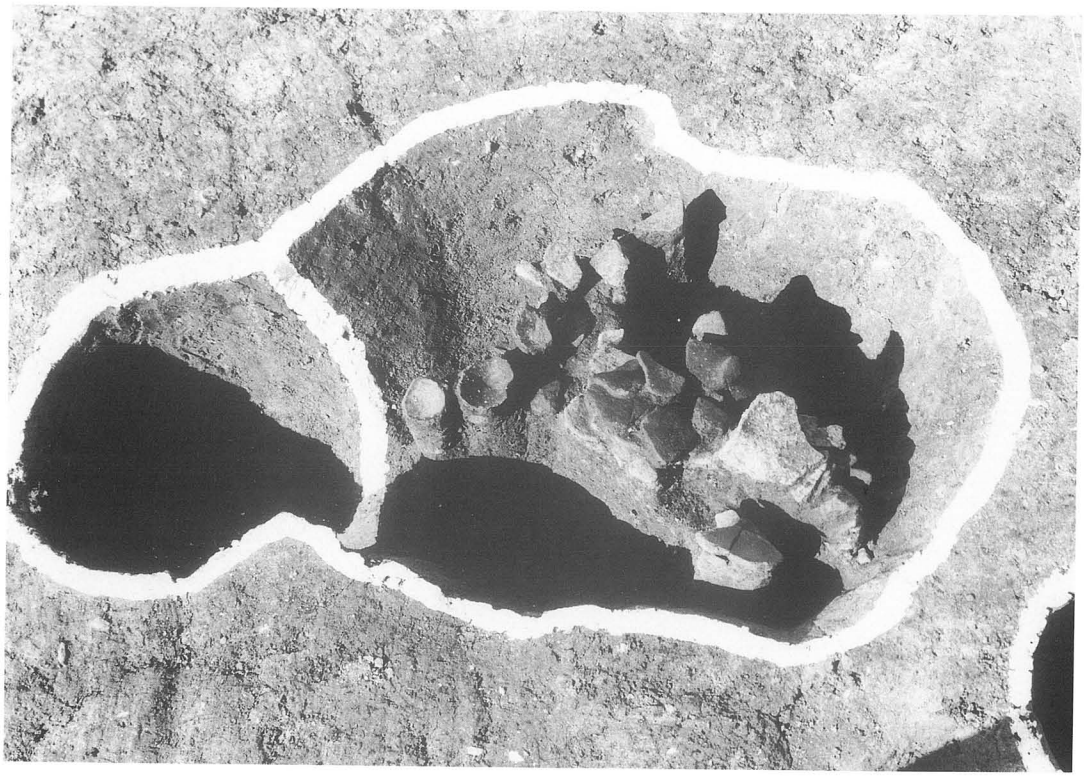
(1)　遺構検出状況（西から）



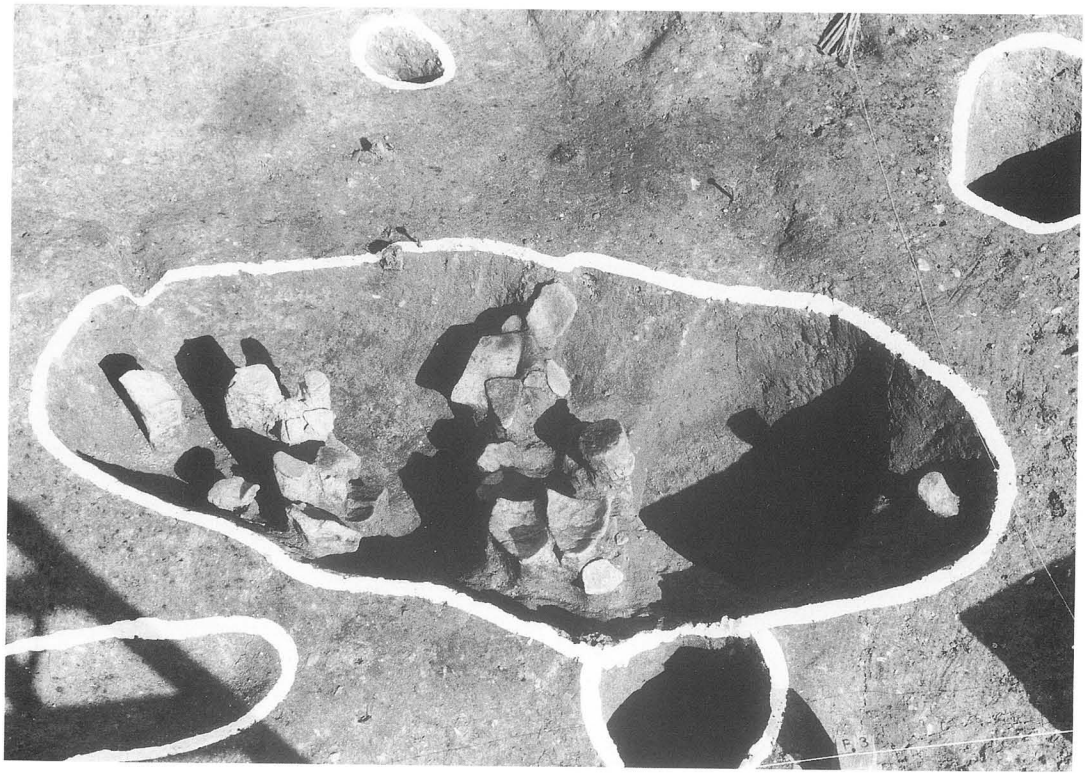
(2)　遺構検出状況（北から）

(1)　遺構完掘状況（西から）

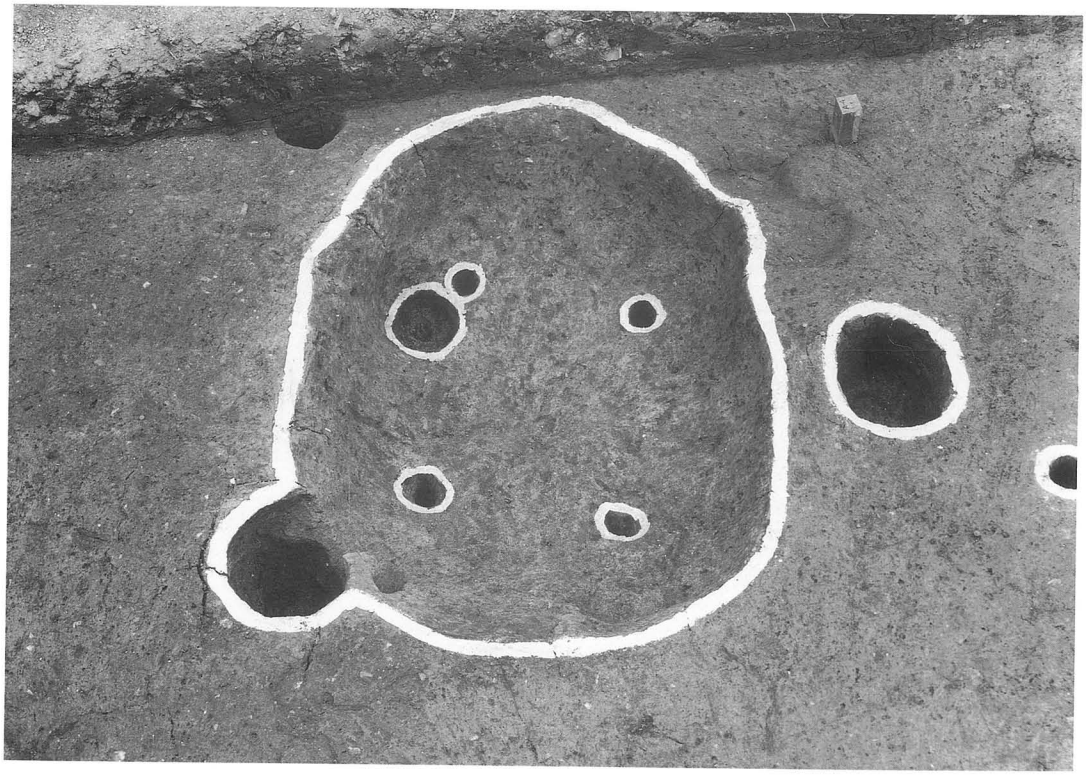
(2)　遺構完掘状況（南から）



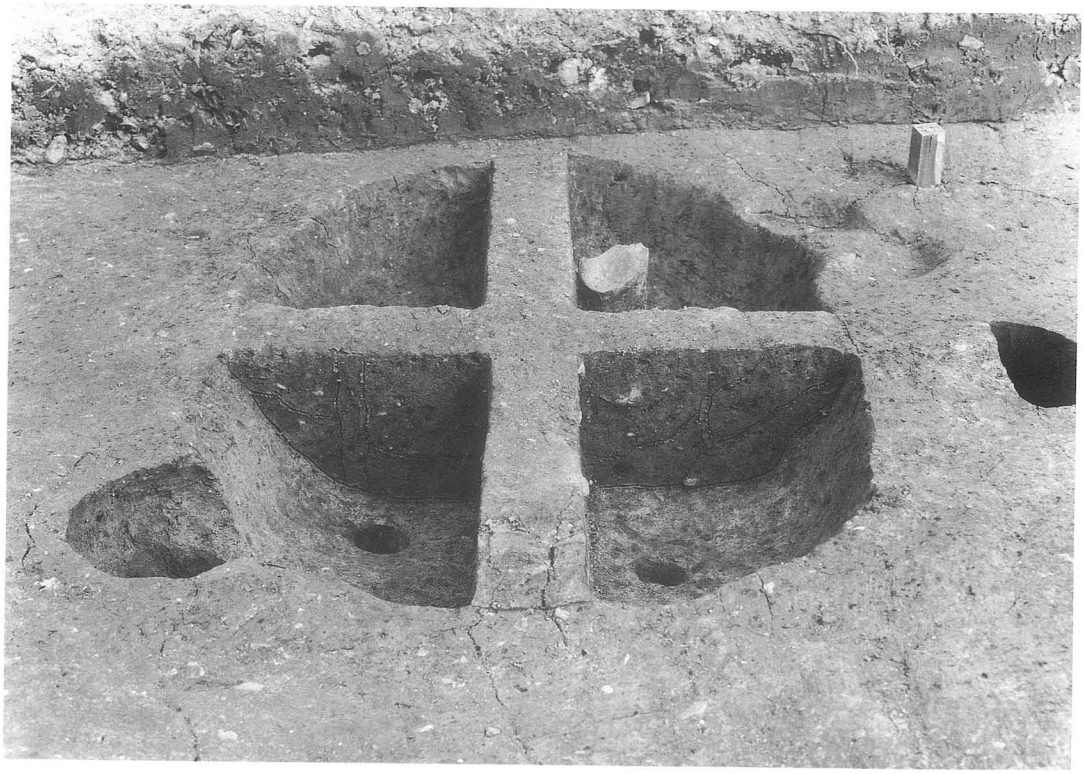
(1)　土坑2（東から）



(2)　土坑3（南から）

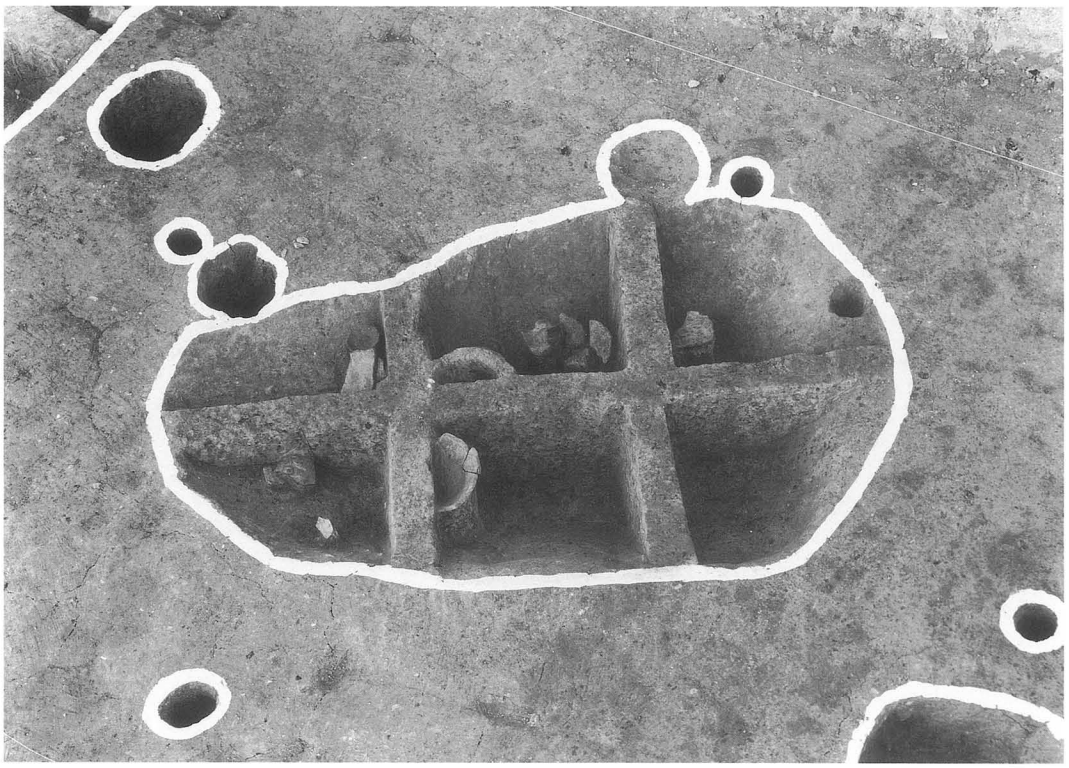


(1)　土坑4（西から）

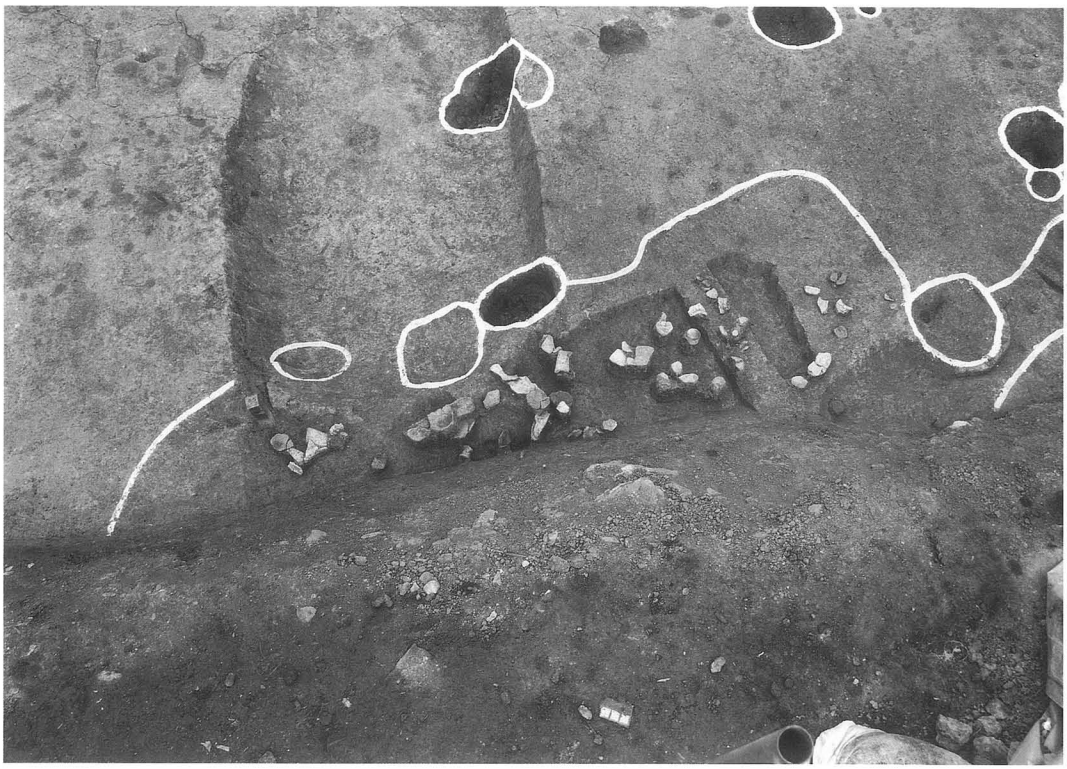


(2)　土坑4土層断面（西から）

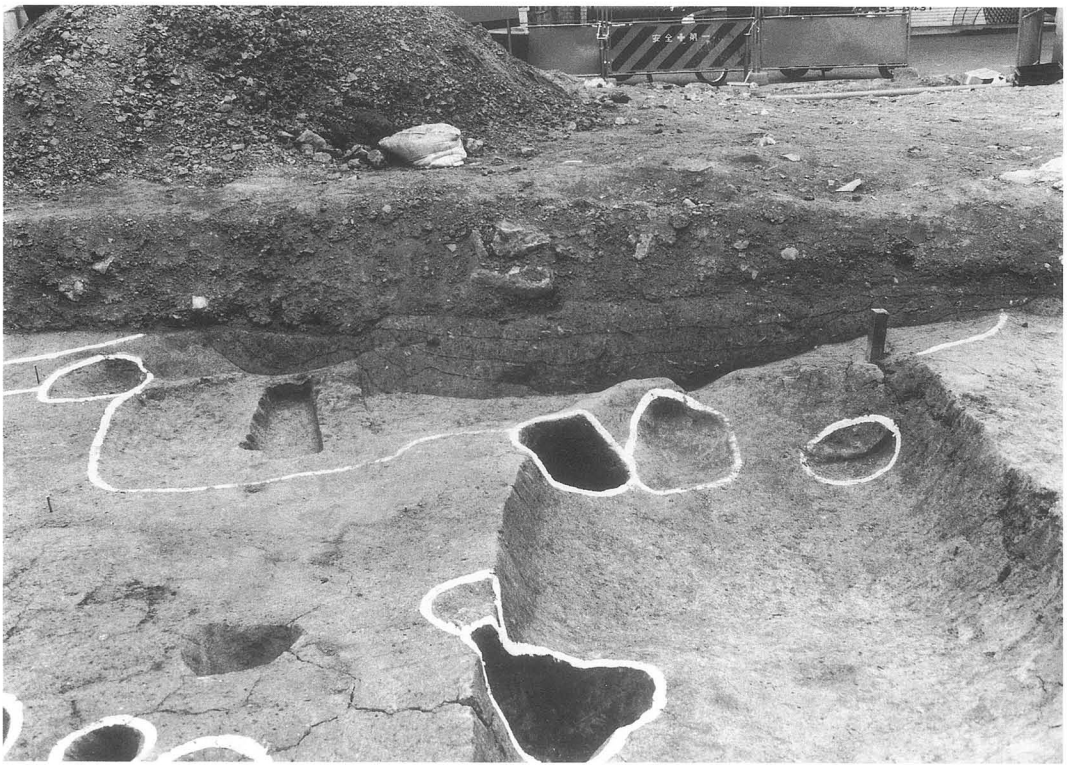
(1)　土坑5　(南から)



(2)　土坑6　(南西から)

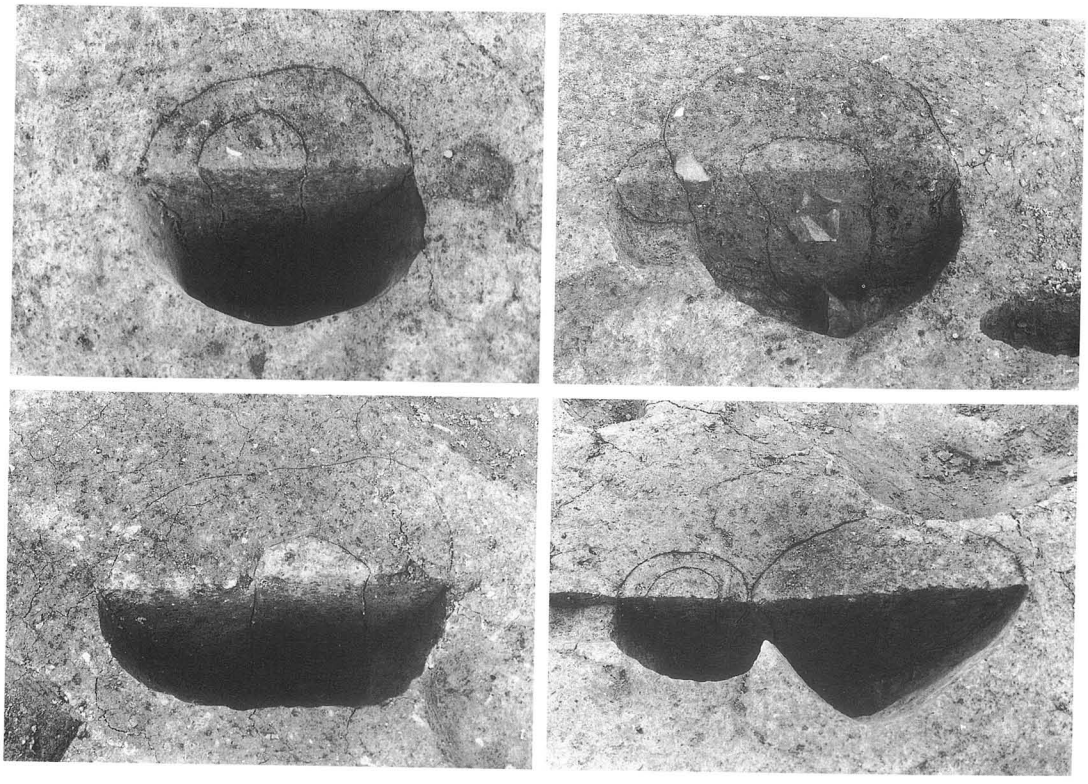


(1)　土坑8（南から）

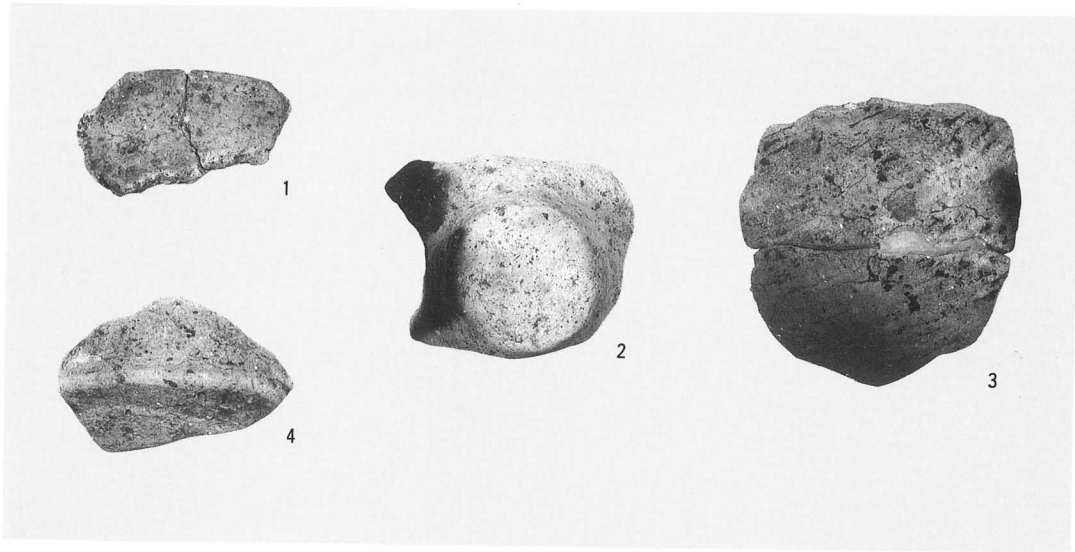


(2)　土坑8土層断面（北から）

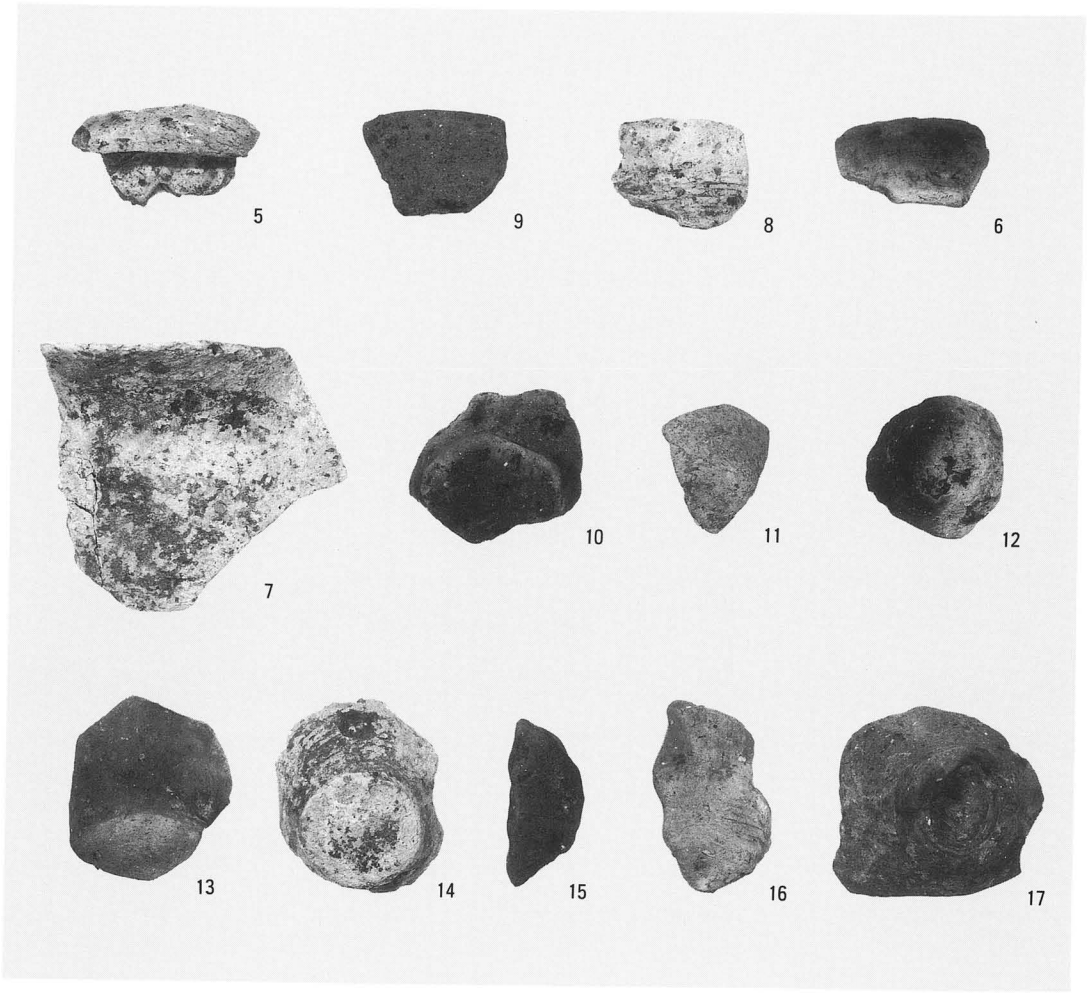
(1)　落ち込み１（南から）



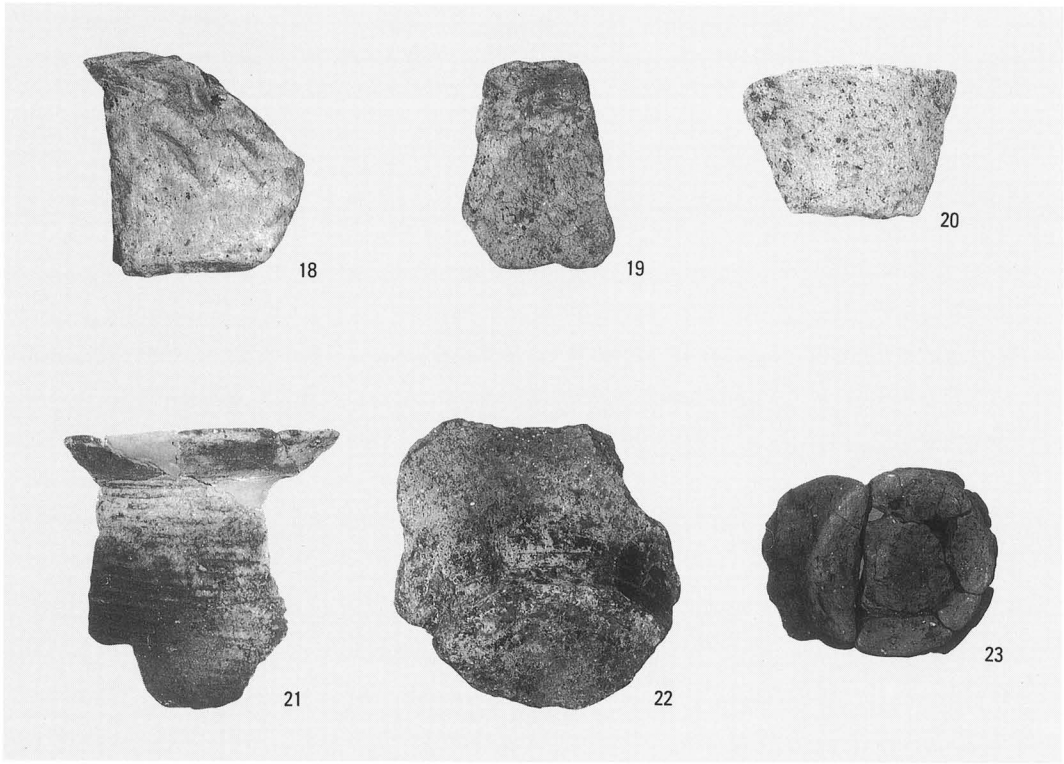
(2)　各柱穴断面



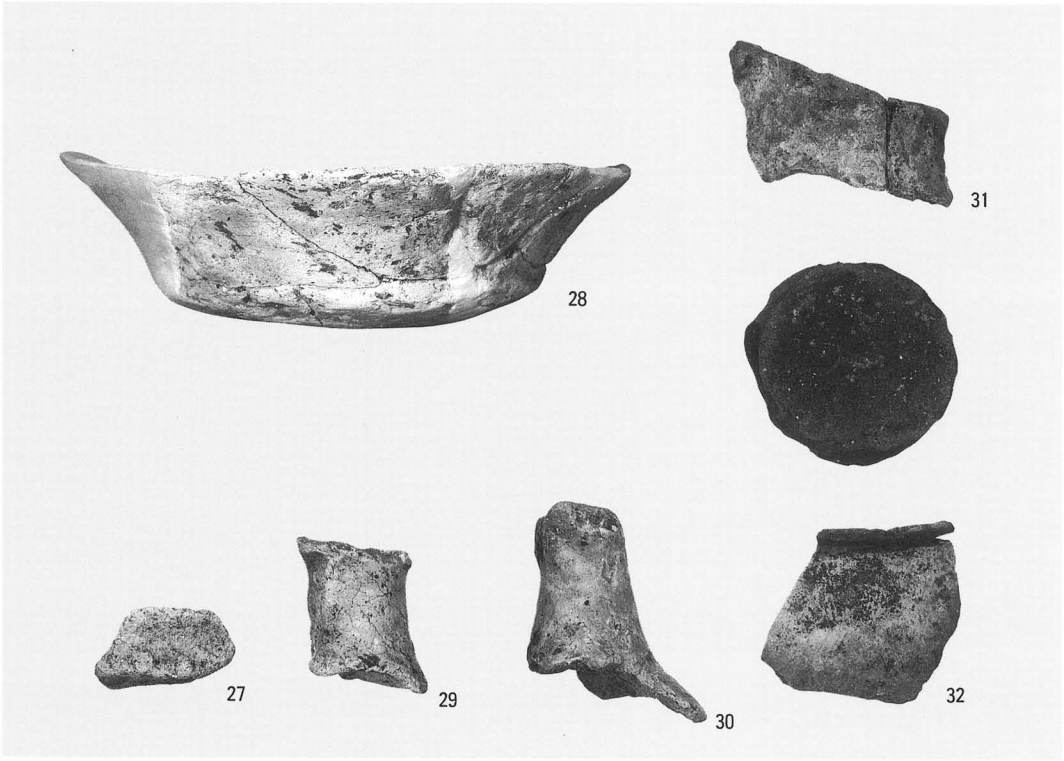
(1)　土坑1　出土遺物



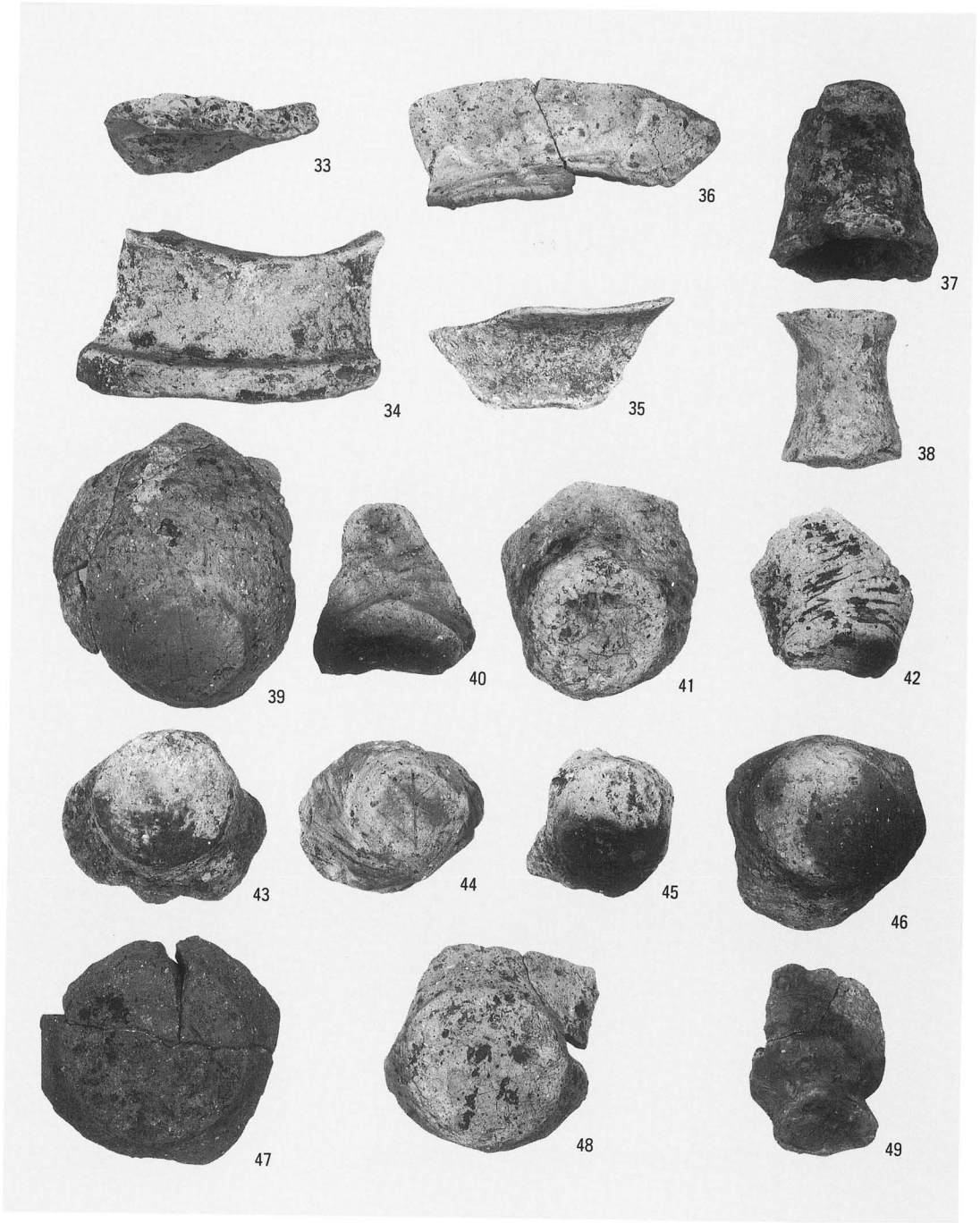
(2)　土坑2　出土遺物



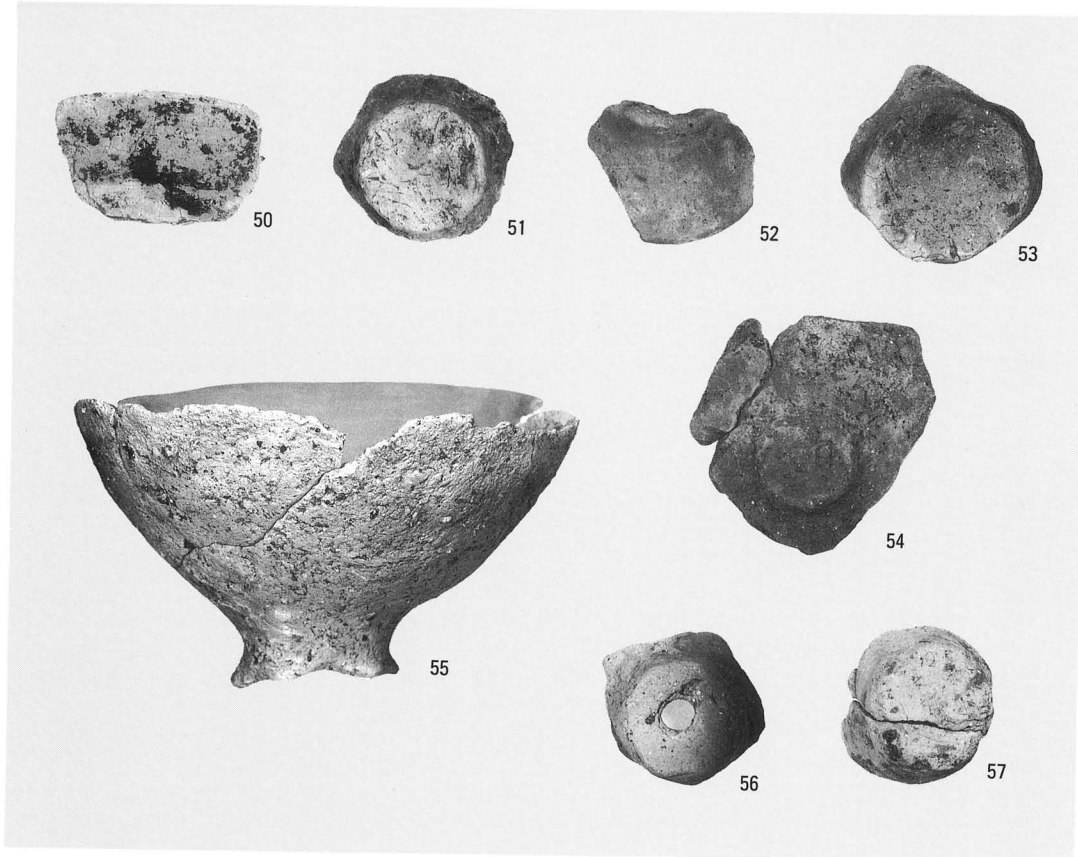
(1)　土坑3　出土遺物



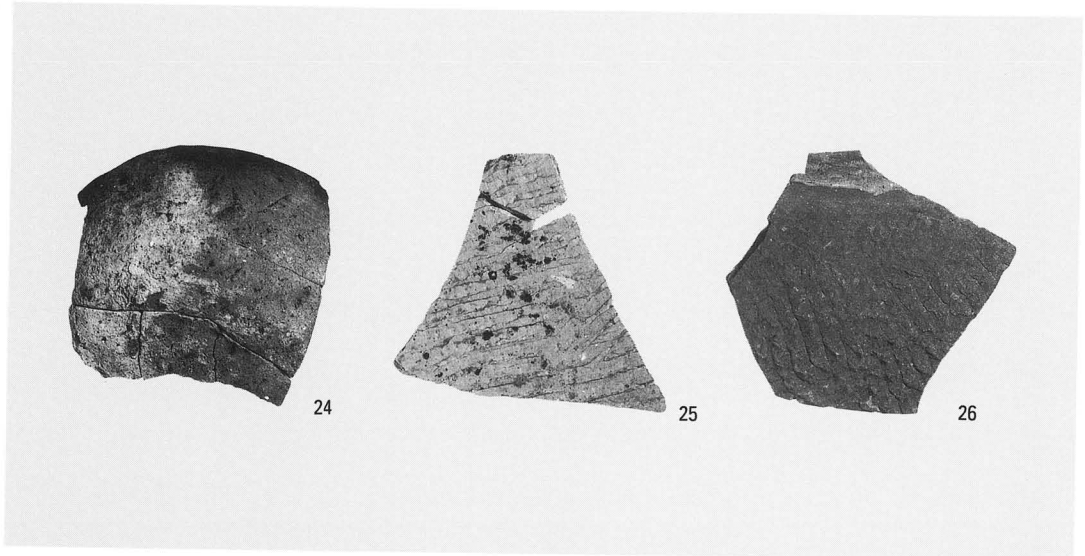
(2)　土坑5・6　出土遺物



土坑８　出土遺物



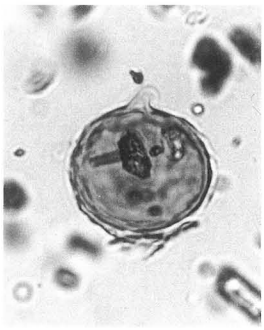
(1)　溝3、柱穴　出土遺物



(2)　土坑4　出土遺物

Ａ３区ＳＫ－４の花粉・胞子遺体

1　マツ属複維管束亜属

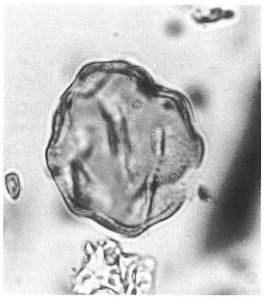


2　スギ

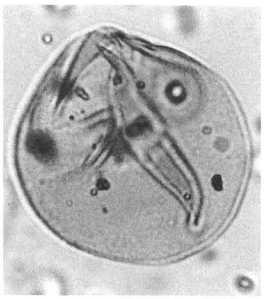
3　コナラ属コナラ亜属

4　コナラ属アカガシ亜属

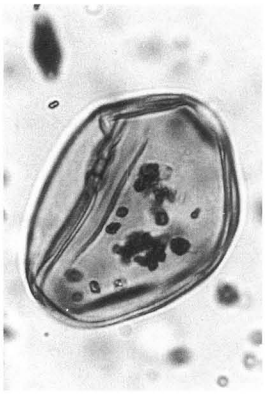
5　ニレ属－ケヤキ



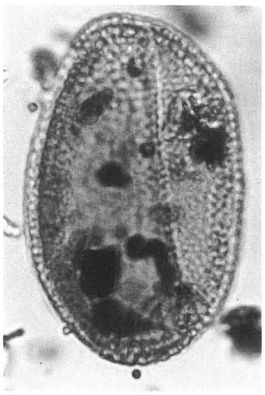
6　サジオモダカ属



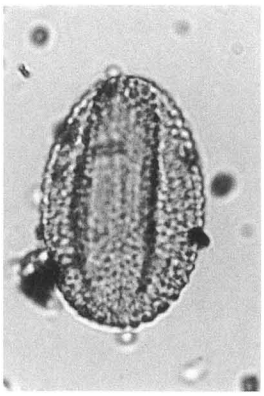
7　イネ科



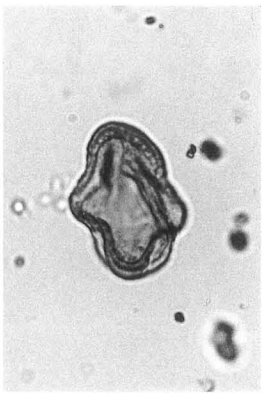
8　イネ属型



9　ソバ属

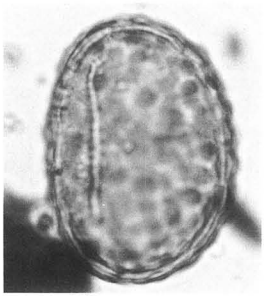


10　ソバ属



11　セリ科

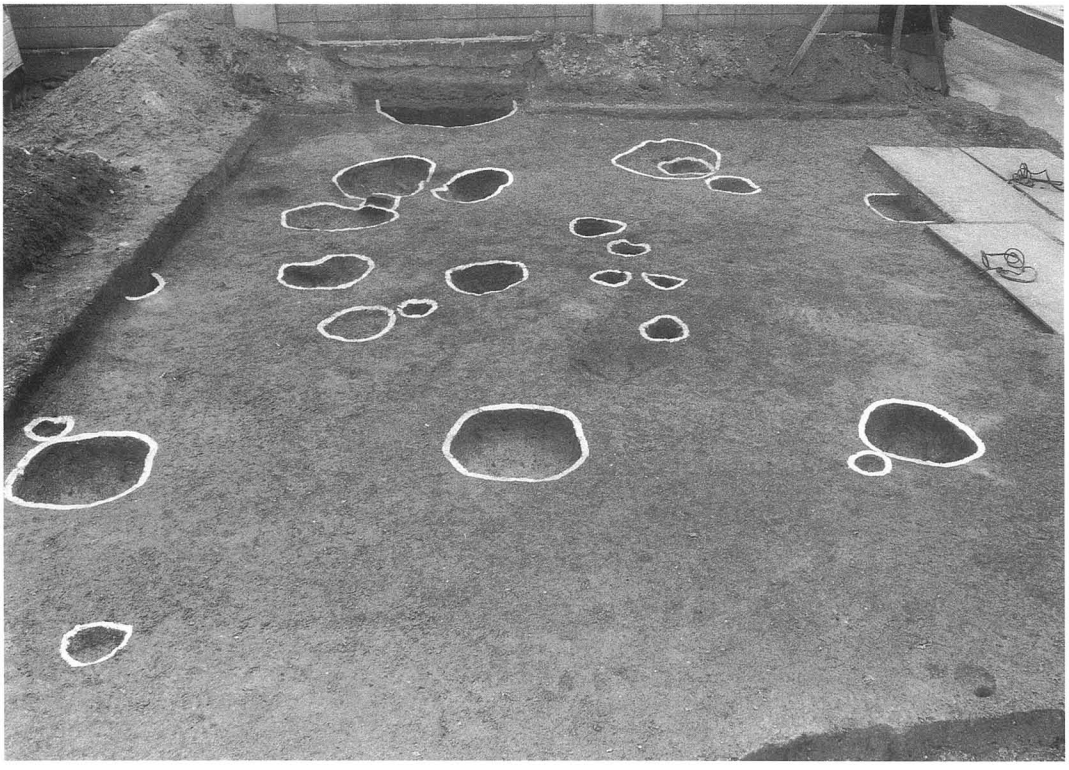
12　ヨモギ属



13　シダ植物単条溝胞子

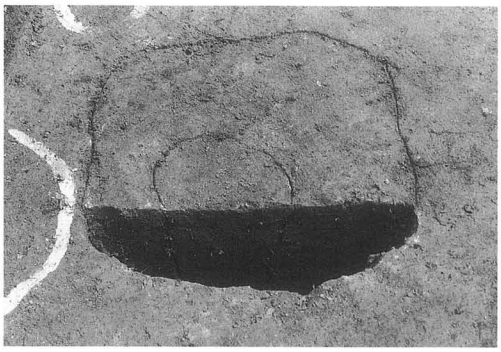
45μm

(1)　遺構完掘状況（南東から）

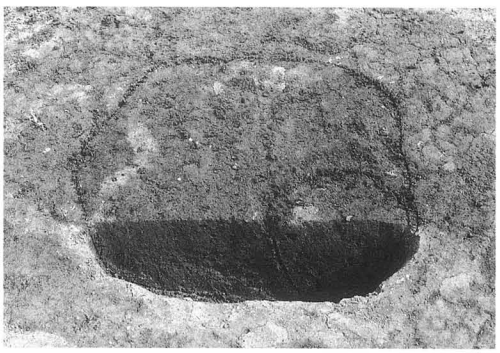


(2)　遺構完掘状況（北東から）

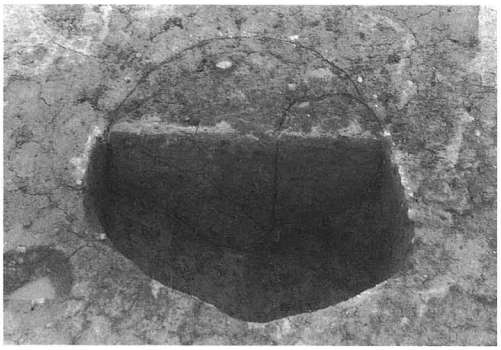
(1)　ＳＫ１　土層断面



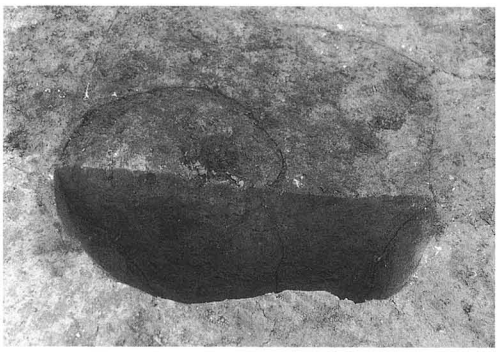
(2)　ＳＰ１　土層断面



(3)　ＳＰ２　土層断面

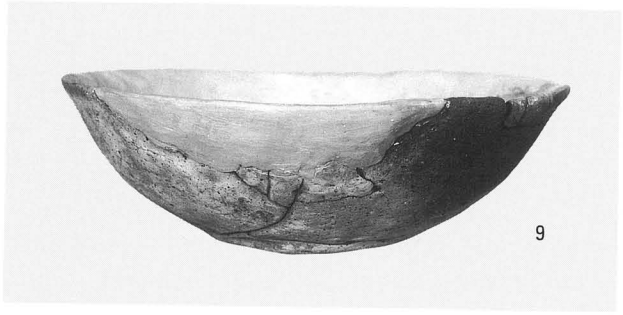


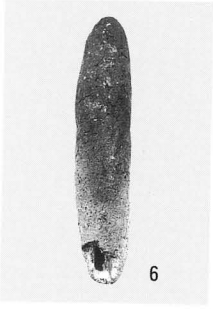
(4)　ＳＰ３　土層断面

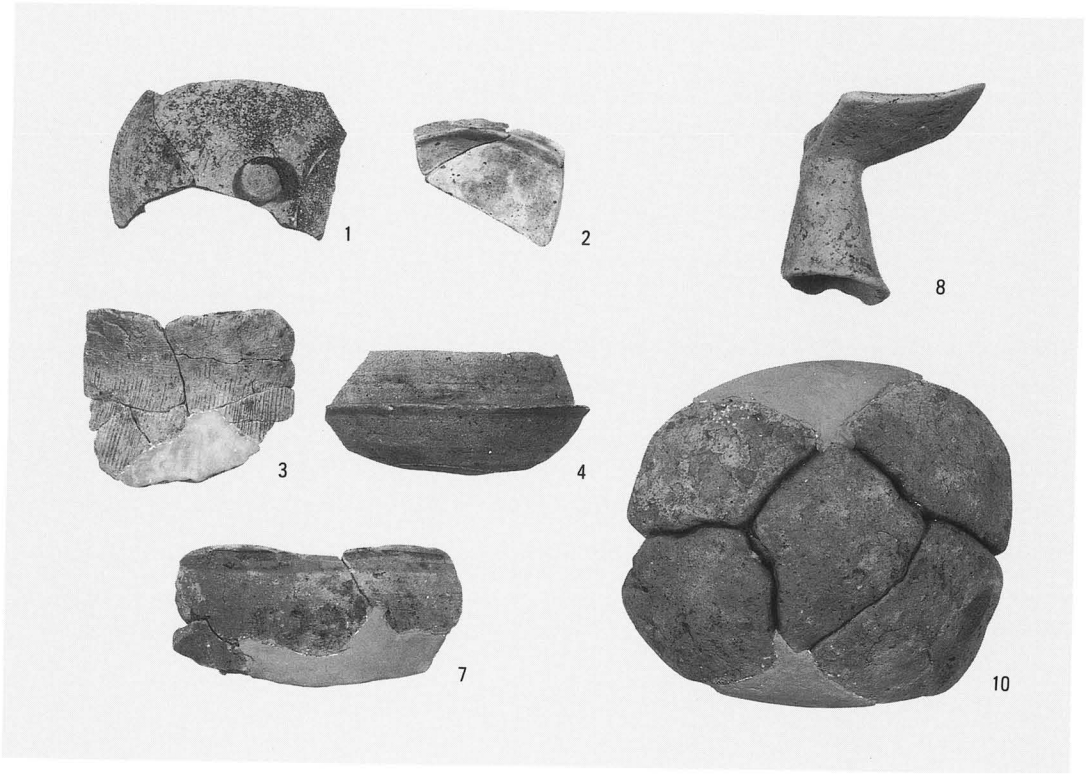


(5)　ＳＰ４　土層断面

図版15　山ノ上遺跡第11次調査地点　出土遺物







（番号は第29図に対応）

報告書抄録

所収遺跡	曽根（そね）遺跡	山ノ上（やまのうえ）遺跡
調査期間	950110～0210	950703～0714
調査面積	133.3㎡	75㎡
調査原因	共同住宅兼用専用住宅	専用住宅
遺跡の所在	曽根西町２・３丁目	立花町１・２丁目・宝山町・山ノ上町
北緯	36°46′45″	34°46′45″
東経	135°27′45″	135°24′50″
遺跡の種別	集落	集落
遺跡の時代	弥生時代～鎌倉時代	弥生時代～鎌倉時代
主要な遺構	掘立柱建物・土坑	柱穴・土坑
特記事項	土坑４は、平安時代の大型掘立柱建物に関連	

豊中市文化財調査報告第37集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成８（1996）年３月

発行　豊中市教育委員会
豊中市中桜塚３丁目１－１
編集　社会教育課文化財保護係
印刷　やまかつ株式会社